

「岳陽」と共に

あくまでも自分史として

(総集版)

P a r t 4

(第 37～48 号)

編集・発行

井上講四／堂本彰夫

令和 7 年 4 月

※本版は、令和5年4月から始めた新通信『岳陽』と共に」を、通して読んでいただく
こうと思い、令和6年度の後半分（第37～48号）を総集したものです。改めての、
ご笑読をお願いするものです。なお、一部若干の手直しをしていますこと、ご了解
下さい。ちなみに、「総集版 Part 1」（創刊号～12号）は令和5年11月に、「総集版
Part 2」（13号～24号）は令和6年4月に、「総集版 Part 3」（25号～36号）は令和6
年10月に、それぞれ発刊しています。下記HPにアクセス下さい。

※連絡先

〒901-2225

沖縄県宜野湾市大謝名 3-13-24

教育協働研究所～岳陽舎～（井上講四宅）

Tel:098-963-9282／E-mail: gakuyou17@outlook.jp

HP URL : <http://www.gakuyou.jp>

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 37 号

発行日 2024.10. 15
編集・発行 井上講四／堂本彰夫
※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ~岳陽舎~ (井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail: gakyu17@outlook.jp

○長野県秦皇村で思ったこと！「奇跡の村」の行く末は？

昨日(9日)、二泊三日での、長野県秦皇村(NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター)への訪問から戻った！(ここで、予定を変更して(そのテーマは次号にて！)、そこで思ったことを、少し述べておきたい(記憶が確かなうちに?)！ただし、その詳しい報告ではない(これについては、別途作成している「新教育協働への道」で行うつもりである!)。要は、そこにある重要な裏メッセージ(あくまでも私がそう思っている?)を、どう受け止めればよいかということである！

同行した7人(NPO一般社団法人関係6人、個人1人)には、それこそ同じ苦労をしているスタッフとの出会いに、大いなる感動と共感を覚える機会となったであろうが、私には、それよりも、そうした事業体(そして、スタッフの思いや活動、否、人生?)が、今後どうなっていくのかということが、一番の関心事となったということである(これまで中核となっていたTさんが、止むを得ない事情で、そこを離れたこともあって!)。本当に、「奇跡の村」とも言える同村ではあるが(これについては、以前にも述べたし、様々な情報提供がある!)、だから学ぶべきことは数限りなくあるとしても、その先を考えるのと、少し不安になるということでもある!!

ひとづくりとまちづくりの一体化(循環)が、あるNPO法人の存在と活躍のお陰で見事に実現されていると言えらるわけであるが、その法人の行く末によっては、村全体が変質(崩壊?)していくこともあり得る(そして、近い将来の?リニア新幹線駅の誕生によって、隣の中核市/飯田市に包摂されていくかもしれない?)!!一つの生活、そして文化圏域である村が、今後どうなっていくのか?全国等しい問題なのでもある!

○「きまり」について想う!大切なのは、その中身!!

話題としては、かなり唐突(これまた?)ではあるが、ここで、「きまり」について、少しだけ語っておきたい!動機は、上記長野への同行者の一人から聞いていた、「条例」の存在(壁?)からであるが、いったんそういうものが決まる(ある)と、大勢がその規制力に負け(おかしな言い方ではあるが?)、必要な事態の改善に、なかなか繋がっていかないということである!

要は、「守る」ことが優先され、なかなか臨機応変の対応が難しいということであるが、「守る」にしろ、「変える」にしろ、それによって、何が実現させられるかが重要なのである!それ故に、それが等閑視され、守ることだけに力が注がれては、本末転倒なのである!かの憲法改正論議もそうだが、押しつけだからダメだとか、きまりはきまりだからとかいった論議は(例の校則問題もそうだが)、何か本質を忘れたものになっていないか?

とにかく大切なことは、「きまり」は必要!しかし、それが、時代にそぐわない、そしてこれからの人達にとって「幸せ」とならなければ、思い切つて変える!これは、多くの葛藤を生むかもしれないが、等しく同価値な約束事である!!その時その時によって、必要なものにしていくこと!それは、憲法であるが、条例であるが(そして、校則であるが)、すべて同じである!

ちなみに、上記「グリーンウッド」の子ども達は、自らの生活の中に「きまりごと」をつくり(折り合い)、集団を成立させている!最初は大人の誘導であるが、それを自らのものとしている!!ここが、大切なのだ!

○こんなことがあった!「教育協働」の意義とはこれなのだ!

過日、S県のHさんから、おもしろい(実は深い?)情報提供があった!彼(ら)が、夏休みに行っている事業(○○ほんそごサマースクール)に参加しているYちゃん(小学4年生?)から、お礼の手紙が届いたそうである!聞くところによると、その手紙は、学級担任から校長へ、校長から、実施主体のコミュニティセンターへ、そして、そのプログラム運営のリーダー(コーディネーター)Hさんへと届けられたそうである!

まあ、これだけの話であつたら、普通によくある(新聞等に掲載される?)「心温まる話」となるが、よく聞くと(さらに、○○すると、これは、取りよようによつたら、今、かなり懸念される「教員の働き方改革」の負の連鎖?「地域と学校(教師)の連携・協力の縮減傾向」に、再考を促すものとなるのではないかと思ひ、ここでの話題提供としたいということである!

どういふことかと言うと、まずは、その手紙が、いわゆる「学校の夏休みの宿題」ではなく(これ自体がなくなっているらしい!)、彼女自身の自主的な提出であつたこと、そして、にもかかわらず、それを受け取った担任教師が、校長に見せ、また、その校長が、その実施主体であるコミュニティセンターまで、それを届けているという事実があるということである!おそらく、そこに書かれている内容(事実や感想)に、担任や校長が突き動かされたこと、そして、そのことを、どうしても、コミュニティセンターの人達に伝えたかったということである!!

実は、このように、「教育協働」とは、互いに無理をして何かを一緒に行うということではない(もちろん、必要な場合は一緒に行うが!)!互いのやっていることを知り、その成果を、相互に生かし合うことが重要だということである!ちなみに、かつて、コミセンと公民館の違いは何かということが、社会教育側での論議ともなってきたが、最終的にはどちらでもよいのである!

大切なのは、そこで働く人達の思いと事業内容(ビジョンも!)が、実際にどうなのか?そこだけなのである!ましてや、学校教育側にとっては、どちらでもよいのである!その双方の意義やメリットが共有されれば、それでよいのである!(井上)

○政治・経済・教育の「トライアングル」の中で!!

この歳になって、言わば「政治・経済・教育のトライアングル」の見方が、と言うよりは、その構造(関係)の意味が分かってきた?ある意味、残念であるが(もう遅い?)、それを気づかせたのが、これもまた、偶々見つけたネット記事である。小幡績という経済学者(京都大学教授)の論文で、今般の政治劇に関わる時事ネタである(東洋経済オンライン「石破政権の誕生は『日本経済正常化』の第一段階だ。タイトルが妙?で、だから最後まで読んでみたわけである!」)。

実を言うと、私は、「政治」も「経済」も、基本的には嫌いである!権力争い、自分達の都合(権益)しか考えていない?そしてまた、損得や効率しか考えていない世界(人々)と受け止めてきたわけであるが(現象的には、そのようにしか見えないので仕方がない?)、教育の世界は、そうした世俗的な世界(人々)とは違って、人間の成長・発達や幸せづくりに貢献する世界(人々)で、可能な限り、その双方からの影響(圧力)をなくす(排除する)ことが重要だと思っていたというのである(単純に言えば「聖域」ということだが、現実はそのではない?その双方からの圧(攻撃?)は凄まじい!!)!

とは言え、「政治・経済・教育のトライアングル」は、私の好悪はともかく、まさに「社会の三要素」であり、それによって、社会全体、つまり国(家)が成り立っている!ただし、そこでの「国(家)」というものは、「社会」の一部ではあるが、それを包摂する「容器」でもある!!そして、その容器のあり方を規定(論議)するのが、実は「政治」である!しかも、「経済」と「教育」は、その「政治」のプロセスを大いに左右する(歴史を見れば明らかである!)!

だから、三者は、分ち難くリンクしているのであるが、しかし、健全(正常)な社会でなければ、その成果は危うい!だから、「社会資本(社会関係資本を含む)・主義」が必要だとも書いてあったが、論としては、まさにその通りである!そこに、「教育」がどう位置づくのか?総体としての教育が(学校教育だけではない!)、どう見えているかである!

○凄まじい、政治家の執念、駆け引き!

過日の総裁選 ここには、何とも言えない、政治家達の間模様(凄まじい執念、駆け引き)が繰り広げられたようである!特に、決戦投票時におけるそれは、劇的でさえあった!次の選挙での勝利、自らの立場の保持、そうしたことが、その投票の決め手となったということであるが、冷やかに言えば、そうした思いの結集が、内外の山積した課題を解決していけるかどうかとは、直接には結びつかない!まずは、自らの保身が必要だったということである!

それはそれで、(人間)社会の厳しい実態ではあるので、ある意味仕方がないが、ただもう一つの現実として、状況次第では、自らの信念や理想を打ち砕かれる人間が、他方では生まれてくるということでもある!そして、場合によっては、その人間は、過去の舞台へと追いやられる!!「担がれる」とは、そういうことでもある(なお、もう一方の代表選!こちらは、元総理の貫録勝ち?とも言えようか?)!ただし、勝負はここからである!!

＜短歌に託して＞秋、到来!物想う時でもある!!
・「奇跡の村」 訪ねてみれば転換点?
生むと続くは 時代の綾?

・「きまり」は必要!
だが守るだけなら 単なる足枷? 心せよ!

・さりげなく示される 「教育協働」の意義・成果!
その発見こそが 社会を変える!!

・政治・経済・教育のトライアングル!
良き社会の要たれ! だが、それを誰が?

・凄まじい執念、駆け引き!
そは何のため? 社会のためもあること願う!

＜特別コーナー＞堂本彰夫の古代史旅枕⑦

○改めて、古代九州の全体像を探るーその8ー
ところで、改めて、問題の「高良山周辺の状況」であるが、その中心になつていたので、4世紀半ば?突然出現した「貴(木)・葛(藤)・国」ではなかつたか!!そして、その中核が、半島南部で出会っていた(和合していた?)「木(紀)氏」と「百濟系宗佛流系王族(藤(藤)氏)」であったならば、事態はよりスムーズに理解され得る!!何故なら、「木(紀)氏」である熊襲系の「松野連系図」に、百濟系王族と目される「藤(藤)氏」の名があるからである(ちなみに、その「藤(藤)氏」の次が、『宋書』に見える「藤」となっており、以下「藤(藤)氏」(武)と続いているわけである(倭の五王!)!

もちろん、ここでは、その「松野連系図」の信憑性が問われるわけであるが、もしそれが真実であるとすれば、「木(紀)氏」と「百濟系宗佛流系王族」との関係は、一応了解されるわけである(なお、その「藤(藤)氏」は、かの「仁徳天皇」とされる倭王「讚」の父親であり、「応神天皇」とされた人物ともなる!!ただし、これはこれで、その照応が難しい!!いずれにしても、5世紀末まで(倭の五王時代に、九州)倭国は、その版図を拡大し、東(公家・橘園家?河内)と西(本家?筑後)に、それぞれの拠点を置いたことは間違いない!!そう考えると、全体の説明がうまくいく!!

しかるに、少なくとも、8世紀初頭までは、本家としての筑紫倭国(九州)王朝は、歴然と存在していたということであり(官都の各地への移動はあった)、その存亡を大きく左右した、かの「白村江の戦い」は、その九州王朝(本家)が主導したということである!!だが、その敗戦によって(しかも大地震も加わって)、筑紫倭国(九州)王朝は、壊滅的な状況を迎えた!!そして、おそらく、それを機に、「天和への集団移住(土地等の相似)」がなされ(先遣隊は、多分上宮(家)・藤(藤)氏)、他方では、太宰府にて、唐軍の駐留(傀儡政権の誕生があった!!もちろん、「記紀」は、その「東(天和)への集団移住」を為した側から描いた歴史書であるので、当然そういうことは記載していない(匂わせてはいるが!!)(つづく) (堂本)

＜編集後記＞ やっと、待望の? 「秋」の気配が、(こ)沖繩でも感じられるようになった(ただし、まだまだ蒸し暑いが?)!人間(国)内外ともは、相変わらず大変な様相を示しているが、心ある人達は、それにもめげず、目の前の課題・難題解決に向けて取り組んでいる!改めて、報われて欲しいものである! (井上/堂本)

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 38 号

発行日
2024.10. 30
編集・発行
井上講四/堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○見えてきたのに、伝える術がない!場や関係もない!!

悔しいことであるが、折角見えてきたのに、それを伝える術がない!場や関係もない!が、そのことを分かってもいい、手伝えるものがあつたら、微力ながら(本当にそう!)協力したい!それが、ここ最近の私のスタンスであるが、なかなか現実には厳しい!しかし、そこに義と理があるのなら、いつかは届く!!そのことを思い続けていくのが、私の宿命?そんなことを思いながらの日々でもある(が、いつまで?)!

とは言え、みんな、それが重要だと思つてはきているのである!ただ、各々の眼前の問題に振り回されて、全体を見ていくことが出来ないのである!!今回の選挙もまた、まさにそういう様相を呈している(何のため、誰のための選挙か?)!!かかるに、その伝えるべきこととは何か?それは、「教育」へり、しかも、全体としてみれば、局的、散逸的であるのまなざしの変化である!「政治」にして、「経済」にして、それを支える(それをよい形にする)人間(子ども)が育つて(生まれて)いないならば、社会(国)そのものが危ない!

「政治と力ネ」とか、「守る」とか、「地方創生」とかいうような言質はあるが、本当に今やる(解決される)べき課題とは何か?目下、教育の世界、それを支える地域社会はどうなっているか?学校(教師)は委縮(疲弊)し、地域は一枚岩ではなく(崩壊状態?)、子ども達は、学力はともかく(それ自体は悪くなっていない)、いじめや不登校等で深刻な状態にある!本当に、これでいいのか?政治、経済、そして教育は、国/社会の要(トライアングル?否、鼎!)である!

だから、政治は、経済と教育の双方から論じなければならぬのである(危険ではあるが!)!まちづくりとひとづくりが循環するということは、実は、そういうことでもある!

○もう少し、続けるよ!

上記では、かなり上擦った言を為したようにも思いますが、実際は、それを前提とした論議(候補者達の政策提示が為されているとは言えるであろう(少なくとも1人はいる!))だが、「教育」に関わつては、歴史的な反省もあつて、法制度的には、政治が、ある意味土足では踏み込めないようになっていく!しかし、そうした隘路?の中で、自らの知恵と努力で、力強い歩みを為している自治体や学校、そしてNPO法人等の、言わば名も無き人々の取り組みもある(これらについては、別途書き進めている「新・教育協働への道」で紹介している!)

だが、如何せん、それらは、まだまだ小さな歩みであり、しかも、全体としてみれば、局的、散逸的である!!しかし、その取り組みの意義(先駆性や汎用性)を積極的に認め、そうした動きを、言わば国策として展開していくならば、まだまだ可能性はあるし、将来を悲観することもない!!教育の力は、強いのである!ただし、問題は、それらをバラバラに行つてはいけないということである(↓学校教育と社会教育の一体的取り組みの必要性)!

誤解されては困るが、その反省なり、しくみ自体を批判しているわけではなく、現下の諸課題を解決するためには、そこでは、経済の力が、どうしても必要であるということ(結局は、予算、経費の問題となるではないか?)、そして、その最適な配分や使い方を為すためには、政治の力が必要であるということである!だが、それは、これまでのような「限られたパイの奪い合い」ではない!そこに、三者の協力(努力)と知恵が必要なのである!

○アニミズム的な自然観・世界観が注目されている!!

話が変わるが、過日、ネット上で、面白い論稿(広井良典「日本で『アニミズム』が保存された3つの根本理由『自然信託』を踏まえた『地球舞臺』の時代へ」東洋経済オンライン)を見つけた。それによれば、『アニミズム』的な自然観・世界観は近年になって新しい形で注目され、再評価されるようになってきている」という。その大きな背景の一つは、「エコロジーあるいは環境問題への関心の高まり」であり、「人間と自然、あるいは生命と非生命(さらには有と無)の間に絶対的な境界線を引かず、それらを包括的ないし全体的な視座においてとらえるという意味において、『アニミズム』は新たな現代性をもつに至っている」ということである(何となくではあるが、分かるような気がする!!)。

そして、これは、「いわゆる自己組織性など現代科学の方向とも共鳴する側面をもつており、『万物の中に魂(soul)あるいはアニマ(生霊)が存在するという信念(animism)』(タイラーによる定義)からしても、ある意味でそれは日本人にとつてはなじみやすい、むしろごく当然とも言える自然観ないし世界観ではないか。そして、『(自然の中の)八百万の神様』、あるいは「鎮守の森」といった表現にも示されるように、日本においては、一つには神道ということも関連しつつ、『アニミズム』的な発想や自然観が広く日常生活や年中行事等の中にさまざまに浸透している」ともあつた。

これについては、先般、我が国における「神社」の多さ、そして、そこにある存在の意義みたいなものを述べたが、まさに、軌を一にするもののように思われる。ただ、『「自然資本」への対応には日本の伝統文化が重要だ』SDGsと「鎮守の森」やアニミズム文化をつなぐ』においても述べたように、近年において気候変動や脱炭素をめぐるテーマと同様に大きな関心の対象となりつつある、生物多様性や生態系に関する話題ともつながっていく!というような話は、私には、とても気宇広大過ぎて何とも言えないが、人が生きるということの意味や「協力」しなければ生きていけないという価値観(経験値)が、どこまでそれと連動しているのか?まだまだリアルは厳しい?(井上)

○「LOFT」?どうも建築関係ではなさそうだ?!

過日、いつものように、PC上のネットニュースを見ていると、「いい職場を作る『LOFT、カルチャー』の作り方」という記事が目にとまった!ちよつと興味が湧いたので読んでみると、これは、現在の教育界(学校)にも大いに参考になるのではないかと思ったりもした!ちなみに、LOFTとは、「Light・身軽ですばやく主体的に挑戦する、Open・開放的で、お互いに助け合い、協力し合う、Flat・関係性がフラットで、仲間感謝し、称賛し合う、Tolerant・耐性、受容性、復元力が高く、粘り強く実行するカルチャー」とある。

「世界のエクセレントカンパニーは組織カルチャーの重要性を経営者自らが認識し、社内に訴えかけ、自ら実践することで、健全で良質な組織の『土壌』を育んできた。思い切り力を発揮し、自己実現できる環境を整えてきたからこそ、世界中から優秀な人材が集まり、新たな価値を生み出すことができています。そして、従業員がのびのびと働ける環境づくりに投資を惜しまず、お金をかけてきた」ともある!

だが、「日本企業は『カルチャー』に投資してこなかった。これまでの日本企業は、『人材に投資する』とは言ってきたが、『カルチャーに投資する』とは言ってこなかった。…人材と組織カルチャーは『ワンセット』で考えるべきもの…。健全で良質な組織カルチャーがあつてこそ、人材はいきいきと働けるのである」と結んでいる!面白いのは、「企業(組織)も、人間の成長発達も、同じように、『木』に譬えられる!花・実(利益・顧客満足)、幹(事業、根っ子(現場)、土壌(組織カルチャー)」!まさに、その通りであるが、企業の方はともかく、人間の成長発達(教育)の方は、他ならぬ、その「土壌(組織カルチャー)」自体が瓦解寸前なのでもある?!

○やっぱり出て来た!共感者はいるのである!

いつかは、このことが記事となるだろうと思っていたが、やっぱり出てきた!この記事の作者(Kさん)ではないが、今、一番楽しみにしているテレビ番組が、NHK BSプレミアムにて放送中の『団地のふたり』である(日曜夜10時。作家・藤野千夜の名義小説原作)!小泉今日子と小林聡美が扮する、団地で生まれた幼なじみのふたり(フエチとなつちゃん)を軸とした、ホームドラマ(近所付き合い物語)であるが、何故かほのぼのとするのである!

その人気の理由を、複数のポイントから解説しているのが、この記事であるが、流石?プロである!ここでは、その具体的な紹介は出来ないが、小見出しだけでも十分感じ入ることは出来よう!「『団地のふたり』の温かさ」「視聴者が憧れるノエチとなつちゃんの関係」「人生の機微を豊かにする団地のコミュニティ」「人生の先輩と接するとのありがたみ」。最後に、「自分の人生の主役は自分よ!」(前回のキーワード?)ということに締められているが、秋の夜長?は、余計な思いに耽ることもなく、過ぎていく!<短歌に託して秋の夜長は、最早半死半生?!>

・見えてきた! そう思つても
・伝える術なし? だから書いていくしかない!!

・必要なのは 「パイの奪い合い」ではない!
・三者の協力(努力)と知恵なのだ!

・アニミズム 懐古とアニメで 花盛り?
・だがリアル世界は それに気づかず?

・LOFT、カルチャー
・折角の造語 教育界にも 是非広げられ!

・秋の夜長? 余計な思いに 耽ることもなく
・過ぎ行く理由もは テレビにもあり!

<特別コーナー>堂本彰夫の古代史旅枕(38)<

○改めて、古代九州の全体像を探る!その9

ということ、おそろく、かの武内宿禰、神功皇后、そして、仲哀天皇及び応神天皇の事績(物語)は、これまで述べてきたような事実を隠蔽するための、ほとんどが創作(捏造?)話であることは言うまでもない!繰り返すように、「記紀」(事実上は『日本書紀』を編纂した、当時の政権勢力(中心人物は藤原不比等)が、自分達の政権の正統性・正当性を創出すべく、そのような人物群を配置したものだということである(ただし、そこに示されていることは、大枠は真実であった?その意味では、それに相当する人物・事績はあったのである?)!!

そこで、その大枠の真実(該当する人物・事績)がどうであったのか?ということであるが、ここでは、その大枠の真実の前にあつた、3世紀末以降の邪馬台国連合の帰趨(台与王権の結末?)にケリをつけておかなければならない!何故なら、その帰趨のプロセス(衰退あるいは滅亡?↓近畿/丹波への移動?)が、ここで言う大枠の真実をもたらしたものと考えられるからである(その意味では、邪馬台国東遷説は、この線上にある?)!!

ただし、それが、例の「神八井耳命」の後裔(前方後方墳勢力?)とされる「多氏」(筑紫君/阿蘇君/肥(火)君/大分君ら)の九州進出(出戻り?)に起因するものなのか?あるいは、『魏志』に示された「狗奴国(球磨會於?)」との攻防によるものなのか?さらには、その双方なのか(多氏と「球磨會於」は微妙に絡んでもいる?)?そこが、今一つ定かではない!そしてさらに、そこには、情勢の悪化から、半島南部から逃げてきた百済系勢力(本宗家↓藤/藤?)が、流入もしている(周辺に作られた山城/神籠石群は彼らの主導による?)!!

だが、状況は、それだけではない!後の継体王権と筑紫君磐井(九州王朝)との確執(磐井の乱)に見られる、継体勢力の九州王権からの分離・分立が、そこに出来しているものもある?!ちなみに、7世紀初頭の「隋」との交流(日出る処の天子/アマタラシヒコ)は、九州王朝のそれであったことは言うまでもない!(つづく) (堂本)

<編集後記> 思わぬ事態から、新たな状況が生まれた?生かすも殺すも、自分達次第である!政治も、経済も、そして教育も、自分達が創り出していかなければならないのである!(井上/堂本)

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 39 号

発行日 2024.11.15
編集・発行 井上講四/堂本彰夫
※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ~岳陽舎~ (井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail: gakuyou17@outlook.jp

○10年目を迎える「教育協働研究所」岳陽舎」！

○米大統領選挙終わる！そこに、怪物がいた？！

さて、私が、この宜野湾市大謝名地区に引越してから、まもなく10年目(実質)を迎える！大学の職を辞す決意をして、長年住み慣れた公務員宿舎を出なければいけなかったの、あちこち終の棲家？を探した結果(本当に探した！当時のミ生達もかなり巻き込んで)、この地での再出発？となったわけであるが、爾来、この自宅(建物だけ取得)を、「教育協働研究所」岳陽舎」と名付け(事業所登録もして)、ほとんどに登場する人物達であるが、最近、あまり顔出しがない？！が、2階書斎？での、PCを使った執筆活動であるが、ここまで続けてきた！毎日長時間の座り作業であったので、目も、私が興味を持つのは、彼らが(他にも、同じような人が足腰も弱ったが、お陰で(否、我が奥さんのお陰で)、自分ないの納得の時間を、それなりに(こう言わざるを得ないが！)得ることが出来た！

ただ、今こうして、ここでの過ぎ去った日々を思い返してみると、本当にこれでよかったのか？そんなことも思わないわけではないが(上空をオスプレー等が飛び交うことも含めて！目の取材ネットワーク、そういうものがあつたということの前の普通天間基地の騒音に気がついたのは、不覚にも住みだしは、3人に共通しているかもしれないが、それにしても、そこからである！)、何よりそうあつたことは事実であるので、そ今回の予想(予言？)は凄いいまさに、怪物？である？！

報(あるいは感觸？)を得たのかということである！彼らに(あるいは自己の存在アピール(顕示欲？)、そういう要素があつたかどうかは、私には知る由もないが、少

とほやえ、書斎？と隣り合わせのベランダからの海(東シナ海)の眺望が気に入る、即決で(様々な借家を探し求め、やっととされる情報を表面的に賑わす？)とは違って、現在のアメリカというところであるが、この家に住むことを決断したわけであら、本当に、ここでの時間は貴重であった(救われた？)！それを、冷徹に見据えてのものであつたのではないかと思つたのであつた！これだけは、是非とも書いておきたい！

リストだと思ひもするが、どうなのであろうか？

○自由と平等、保守と革新、その絡みについて想つ！

今更、こんなことを、しかも青臭く述べることは、氣恥ずかしさも覚えるが、今回は、少しは語つていてもよいであろう！と言うのも、先般衆議院選挙も終わり、ほとんど変わることもないであろうと思つて「JK政権」に終焉の兆候が現れ始めたからである(ただし、それは、内部崩壊というよりは、Jへの批判(鉄槌？)ということから生じたものであるが？)！

とは言え、今般の米大統領選挙のような二大政党制ではないこともあつて、その変化には、さほどのものはないであろう？しかし、これまでにないような局面が生まれているのも事実である(いくつかの政党のしたかな駆け引き？)！もちろん、私には、それがどのようになっていくのかは分からないが、そもそも、政治においては、いわゆる、社会における「自由」と「平等」を、どのように実現していくのかの大きな使命があるはずである？果たして、現在の各政党は、そのことをどのように受け止め、自らの獨自性(存在意義)を發揮しようとしているのか(政党名は入り乱れているが！)？そこが見えない、見えにくい！

しかるに、従来は、「保守」対「革新」というような対立軸で、そのことが分かるような状況にあつたが、今や、そのような対立軸も、実際には過去の遺物と化している？否、浮遊している？言つてもよい！何を守り、何を新しく生み出していけばよいのかは、そこそ社会全体の課題であるが、言葉遊びではないが、保守の革新とか、革新の保守とかというようなことさえ、あり得る！実は、それが、昨今の政党状況であるとも言える？！

そんな中で、各党(事実上は政権政党？)は、内政と外交の両面において、ますます複雑多様化する諸課題を、かの「自由」と「平等」という普遍的価値に則つて、如何に対処していくか？民主主義(国家)の危機とか、権威主義(国家)の横行とか、状況は深刻な方向に向かつていとも言えるが、その双方の価値を見失えば(換言すれば、おろそかにすれば？)、事態は、ますます混迷化していく？！頑張れ、政治家！だが、やはり、彼らを選び、支えていくのが、国民(市民)の権利でもあり、義務でもある！まずは、そこから見通す必要がある！

(井上)

○結局は、人の「生」をどのように論じるかでは？

過日、面白い記事を見つけた。それは、日本社会の『最大のガン』の正体。私が『ポスト・モダン』だけを語る人たちが嫌いだ。理由と題するもので、「熟慮や中庸といった精神的な姿勢の価値が回復されねばならない」とするものであった。作者のH氏（1972年生）は、2012年から福島県南相馬市で精神医療に携わる「メンタルクリニック院長」で、うつ病や自殺などについて精神分析学や社会病理から考察する論文を発表している人らしい（著書に『日本的ナルシズムの罪』：「現代ビジネス」10月22日配信とある）。

私が興味を抱いたのは、彼が、「福島での原発事故の後には：南相馬市に移住してから、政治的な事柄について考えたり発言することが増えた。当初から自分のことをいわゆる『左派・リベラル』だと自認してきた。しかし、10年以上の年月を経て、次第に保守的な姿勢が強まった。今回はそのあたりの事情を説明したい」ということであつた。

私には、「モダン」も「ポスト・モダン」も、よく分からないが、そうした哲学や歴史認識論議は、それを、個人の視点で捉えるか、社会（集団／国家）の視点で捉えるか、その違いは大きいのかもしれないが、大事なものは、そこで、「一人ひとりの人間の生をどのように論じるか」だと考えている！そして、その一人ひとりの人間が、自らの生をどう受け止め、そして生きてきたか（さらには死んでいこうとしているか？）！そこが重要なのではないかと捉えている！

なお、今回は、記事に対するコメントが、さらに面白かった！もちろん、？なものもあつたが、それぞれの知識が素晴らしく、久々に知的好奇心がくすぐられた！本当に、ネット上には、知性豊かな人々がいるものである（ただし、その逆の人も多々いるわけであるが？）！やはり、「知」は大切なのである！

○ドジャース優勝！ただただ、そこにいる怪物が眩い！

過日、大谷翔平が所属・活躍しているドジャースが、メジャーリーグ制覇を果たした！予想されていたのかもしれないが、そんな中でも、その通りに成就できたことが素晴らしい（戦力面で言えば、ある意味当然？）！でも、私には、そのチームの優勝とかは、正直言つて、あまり興味はない！何故か、かの大谷翔平のプレーだけが目に留まるのである（最後の数試合は、少し可哀そうであつた？）！同じ怪物？でも、「君には何も言えず！ただただ、見てて楽しい！そして、眩い！」、まさにそういうことであるが、その理由は、果たして何なのであろうか？

前にも書いたように思うが、彼は、本当に、プレー自体に興じている！否、彼は、「野球の妖精」ではないかとも思える（身体はでかいが！）？野球のこと以外には目もくれず、ただただプレーすることを楽しんでる？そんな感じである（もちろん、実際はそうではないであろうか？）！来季は、本来の二刀流に戻るであろうが、たとえ成績自体は芳しくなくとも、その姿そのものが価値なのである！

＜短歌に託して予言や予感に誘われつつ＞

・ 悩みし日々 終わつてしまえば

それによし！ まだ続けど 一味違ふ？

・ 予言か予想か？ メディアを嘲笑もろ

怪物いる？ ならば常に 正しく導け！

・ 自由と平等 普遍的価値だが

そこが見えず？ 保守も革新も 心せよ！

・ いい社会とは？ 己おれの生の意味

一人ひとりが 最期に語れる社会では？！

・ 同じ怪物でも、君には何も言えず！

ただただ見てて楽しい そして眩い

＜特別コーナー＞堂本彰夫の古代史旅枕 ⑨

○改めて、古代九州の全体像を探る―その100―

では、改めて、その「継体」勢力の、九州（筑紫）王朝からの分離・分立というのは、具体的にはどういうことであつたのか（船紀という継体王朝ではないので、その説明は、真に難しいのであるが！）？実は、その事実は、かの「九州年号」↑『甲歴』から見出すことが出来る！なお、九州年号とは、当時の倭国（九州）（筑紫）王朝・後の五王時代、政権が制定していた年号で、しかもそれは、列島全体で施行されていたものである（その証拠は、既に多く見出されている！）！

それはともかく（でもないが！）、問題は、その創始の年号である「継体」である！その年号（消されているものもある）であるが！は、517年から521年までのもので、以下、「大化（695）↑大長（大定）」となつている。しかるに、同年号は、478年に即位したとされる「武」の後裔政権が、そこから39年自にして建元したとされるもので（その意味で、その後裔政権は、そこで新たな主統を意識した！）「宋」を主国としないことか？、その「継体」という元号名は、517年から始まる「新政権」が、その前の政権を「継体」したということを示しているのである（何故なら「武」の即位年／478年を、その「新政権」の淵源としているからである！）！！

では、改めて、その517年から始まる「新政権」を樹立したのは誰か？おそらくそれは「武」の後継者ではあるが、しかし、正統な後継者ではない誰かということになる！！ここで思い出されるのが、528年に起こつたとされる「筑紫君磐井の乱」である！しかも、それは、実際は、515年であつたそうである（この頃の書紀の記述は、133年のズレがあるらしい）↑「兼川晋」氏による！）！！もし、そうであれば、その乱の解釈は、通説を根本的に覆すものとなる！！すなわち、この乱は、筑紫君磐井（本家は本家九州王朝の王）が、近畿の「継体天皇」の命によつて、物部種麿火から滅ぼされたといふものであるが、「新言」↑「新政権」を樹立したのは、他ならぬ、その物部種麿火ということになる！！（つづく）

（堂本本）

＜編集後記＞様々なことが終わり（本日は終わってはいないのだが）、今は、来るべき次を、密かに見つけ出そうとしているようにも思う？ある種の「祭りの後の静寂」？否、「嵐の前の静けさ」？そんな感じなのかもしれない！季節外れの台風が、遙か南方海上を、複数で彷徨っている！大雨が、また来るとも！（井上／堂本）

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 40 号

発行日
2024.11. 30
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○折角のチャンスなのに、それが生かせない？

さて、毎回、このように言っているようにも思うが、近年、私が提唱している「教育協働」への機運が高まってきているように思えるが（ほとんどがネット情報によるが）、なかなか、その拡大発展が見られない？否、そうなのかもしれないが、少なくとも私の周囲では、それが芳しくない？むしろ、私が知らないだけということであれば（その可能性は大？、それはそれでよいのであるが、今一度、ここで書いておきたいことは、これもまた、何度も言っていることであるが、関係者は、何もしていないわけではなく、そして、諦めや無能感を募らせているだけではなく、自分達なりの変化への対応もやっているといることである（過日の卒業生・小学校の教員からも、そのことは聞いている！）!!

では、何故、それらが、前面に出て来ないのだ？マスコミが、それらを伝えて（掴み切れて？）いない？当然、そういうことも考えられるが、やはりそこには、何か大きな問題（壁？）があるということである!!それは、端的に、問題解決の枠組みが変わっていないということである！例えば、これまで、直接は関わっていないと思われた（実は、思わされていた？）組織や機関が、今や密接な関係となっていたり、そこからと協働することによって、思わぬ成果や副産物？を得るということもあるということである！

ちなみに、かつてI・イリッチが、人々の「生涯学習」には、「ラーニング・ウェーブ（学習の網状組織）」が必要であると唱えていたが、それは、他ならぬ学校教員にとっても、是非とも求められるものである！硬直した、旧態依然たるシステム（研修等）では、最早限界があるのである！

○雲、そして群衆（両クラウド）が降りて来た？

そんな中、現在、クラウドファンディングとか、クラウドミーティング、クラウドワークス、クラウドサービスとか、この「クラウド」という用語・発想が多用されている！しかしながら、よく調べてみると、この「クラウド」には、「雲」という意味の「cloud」と「群衆」という意味の「crowd」があり、日本語の発音のせいでもあるが、かなり混同されてもいるようである！

単純に言えば、例えば、クラウドファンディングとは、「現代ではインターネット経由で実施する事例が多く、また日本語の音韻体系では「コ」と「ク」が区別されないため、クラウドコンピューティング（cloud computing）の「cloud（雲）」と混同して「loud funding」と誤表記されたり、関連性があると思われたりすることがある。しかし、両者に関連性はなく（インターネットやクラウドコンピューティングを使うことは必須事項ではない）、インターネット技術の発達前からクラウドファンディングは存在していた！そうである（ネット情報による）！

言われてみれば、確かにそうだが、とにかく今では、この「クラウド」が、双方共に重要であることは間違いない！「降りて来た」という表現は、「雲」の方なら分かるが、「群衆」の方は、なかなかピンとこないと言われればそれまでであるが、「コ」と「ク」の違いのだから、必要以上に結びつける必要もない？、やはりそれは、実体？としては、クラウドコンピューティングの世界で実現されているわけであるので、我々一般庶民からすれば、「雲」と共に「群衆」が降りてきたとも言えるであろう!!

○「技術」で、「思い」が合わさる！それは福音であり、それを生かさない手はない！

いずれにしても、上記で敷衍したかったことは、たとえ「クラウドファンディング」（多数の人による少額の資金が他の人々や組織の財源として提供されること。「ソーシャルファンディング」とも呼ばれる）が、群衆（crowd）と資金調達（funding）を組み合わせた造語であつても、関係を越えた（あたかも頭上の雲・cloudのように）「クラウドコンピューティング（cloud computing）」の技術を使つてのそれであれば、まさにそこで形成されている世界（新しいネットワーク）が、知らない人々同志の思いを繋げているということであり（情報入手や交換、あるいは、それを活用した資金運用やビジネスの創出等）、それは、紛れもない「福音」であるということである！なお、昔は、「カンパ」（ロシア語らしい！）というものもあり、事実行為としては、従来から存在していたわけではある！ただし、そこには、言い古されているように、「福音」とは真逆の、「犯罪」「不正」といった「悲報」の温床も、同時に存在している！「便利なものには、一方で、必ず落とし穴がある！」ということでもあるが、だからと言って、その恩恵を放棄することとは得策ではない！しかも、待っているだけでは、事態は、悪くなることはあつても、なかなか好転しない？諺に、「待てば海路の日和あり」というようなものがあるが、物理（気象）的な潮目はあるが、人の世での、しかも目まぐるしく変わる状況にあつては、しかも、年齢や資金の有限性を考えれば、それも悠長なこととは言っておれない！現実には、厳しいのである！

ということ、結果的には、何とも陳腐な言葉を為しているようにも思うが、ここで敢えて言いたいことは、カネや地位や名誉などに関係なく（言い換えれば、たとえ鳥合の衆、孤独な群衆の中にあつても）、ある人の思いを受け止め、それに応えたいという人が、技術の進展によって、新しい出会いやビジネスチャンスを生むということに注目しているのであり、それが貴重であるということである！弱者同士、一つの力（知恵）とも言えるが、是非こうした人々の動きが報われて欲しいものである！犯罪や不正等の悲報は、もうこれ以上聞きたくない!!

（井上）

○「蜘蛛の糸」より凄い、もう一つの「蜘蛛の糸」!

ひよんなことから、かの芥川龍之介の「蜘蛛の糸」のことを思い出した!最近の世相から、何か比喩になるものはないかと思つたからである!!ジャンルとしては、児童文学ということになつてゐるようであるが、私には、とてもそのように思へなくて、人間社会(天人達)の醜い現実を、辛辣に批判してゐる寓話と思えるのである(尤も、児童文学には、そのような要素が、もともと込められてゐるとも言へようが?)!折角であるので、内容確認のために、これに関するネット記事を探したが、そこで大変な副産物?に遭遇した!それは、サイエンス・フィクション作家小松左京(かの『日本沈没』の作者)の作品に、同名の掌編(超超短編)小説があるということであつた。

そして、その解説によれば、「彼はまず、『カンダタが糸を放せと言つたのは当然』と評してこの作品を批判した上で、別世界の話として、同様の話を書く。ここでは、地獄に落ちたカンダタは蜘蛛の糸を降るされ、それを伝つて上がり、ふと下を見ると、他の者も上がつてくるのを見る。しかし、彼は彼らを追い落とすより、慌てて伝い上がることを優先、しつかり極楽に上がる。釈迦の方がこれに驚き、他の亡者の登土を阻止しようとして失敗、代わりに地獄に落ち、亡者たちは極楽へ。しばらくたつた後、カンダタが地獄を覗くと、釈迦が血の池で苦しんでいる。彼は以前のことを思い出し、蜘蛛の糸を降ろす。釈迦がそれに気がついて昇り始めるが、ふと下を見ると、何と地獄の鬼や閻魔まで昇つてくる。『お前たちそれは駄目だ』というと、蜘蛛の糸は切れ、釈迦は地獄へ真つ逆さま。」といったことだつた!

何と言うパロディなのだ(しかも、この方がリアリティもある?)!神仏の加護を冒瀆する、とんでもない代物だという言もあるが、そうとも言えない!!余計なことだが、同じモチーフの作品?が、内外に幾つかあるということでもある!やはり思うことは、一緒なのかもしれない!!

○現代の「健陀多かたた」は?そして、「蜘蛛」は?

上記から続くものとなるが、芥川が描いた(ひよつとした)らくつていたのかも知れないが?「蜘蛛の糸」は、現代では、どのようなのであるか?私としては、小松のパロディの方が、よりしつくりいくような気もするが(誰が「健陀多」かは別として)、少し、私なりのオリジナルを加えると、そこで登場する「蜘蛛の糸」とは何かということである!お釈迦様(観音様)の方は、何となく分かるが、健陀多が降ろすそれとは何かということである!どちらにも、それを降ろすことが出来るものとするのなら(小松)、それは何か?つまり、慈悲(偽善にもなり得る?)に代わるものということになるが、それは、やはり「正義」というものである!だが、それもまた、同じように切れる?救いは、誰でも出せるということであるが、問題は、何故「蜘蛛」なのか?そして、それに「糸」を出させるのは誰かということである!ちなみに、蜘蛛は「スパイダー」であるが、それが造る「ウェブ(網状組織)」は、まさに人と人との繋がりである?だから、「蜘蛛」が選ばれた!!

- ・短歌に託して!今回は、群衆と雲と蜘蛛?!
- ・ラーニング・ウェーブ! 今まさに
- ・教員に必要! クラウドを信じ 活用せよ!
- ・そのクラウド 一つあり!
- ・雲と群衆だが 今やいずれも 味方となる!!
- ・「技術」で、「思い」が合はざる!
- ・それは福音であり、生かさない手はない!

「蜘蛛の糸」 弱き人間への 救いの手? だが誰が降ろすも やがて切れる!!

結局は みな「健陀多」!! ならばその糸 切れないように 工夫するだけ!!

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕(40)

○改めて、古代九州の全体像を探る―その11―
そこで、もし、そういうことであれば、例のおかしな話も(近畿の?)継体、乱に勝利すれば、自分は真南(東)本州を制し、豊後には、筑紫以西九州を任せると言つたということ、俄然真実味が出て来る!!そして、まがりにも、その政權(物部政權)上(皇室)が、8世紀初頭まで、その九州年号を制定してゐるわけだから、倭国(九州)王權は、少なくともその時までには存続してゐたことになる(600年の「アマタラシヒコ」も、その王朝であつた!!)ただし、そこで齟齬が生じるのが、記紀が記す「雄略天皇」や「継体天皇」等の事績(否、存在そのもの?)である!

というのも、例えは「雄略天皇」は、即位(逝逝)年は456(4479年頃?)年とされておられ、宋に遣使した「武」(478年に即位?)とは、ほとんど被つていない?それよりも何よりも「武」は、ある意味始祖王?的存在であるので、雄略ではない(武が雄略であることは定説とされているが?)しかも、彼は、埼玉の熊谷山古墳及び熊本県の江田船山古墳の鉄剣名にある「ワカタケル大王」ともされてゐる?どうしたものか?!

また、「継体天皇」は、応神から(仁徳)履中、反正、允恭、安慮、雄略(清寧、聖徳、仁賢)、そして武烈へと続いた「応神王統」を、まさに「継体」したかのように見せかけられてゐるが(応神5世孫?ただし、その尊号は後から送られたもの!彼は、九州年号の「継体」という名前を被されたということか?)、そもそも近江または北陸から招かれて即位したとされるので、少なくとも九州王朝の王ではない!!ちなみに、「武烈」は、まさに「重の意味の「継体」のために捏造されてゐるということでもある!!

いずれにしても、ここでの問題は、528(515)年の乱?によつて3世紀末から創り上げられてきた倭国九州(筑紫)王朝(高良山周辺)が(変質)崩壊(?)し、そこから二つの皇統に分かれたということである!!一つが、その倭国九州(筑紫)王朝を、文字通り「継体」した「九州(物部)王權」、一つが、そこから近畿に移動した(すく)ではない!!(「記紀」が描く「継体王權」ということになるが、その二つの勢力(王統?)は、共に「九州(筑紫)倭国」のそれであつたということである!!(つづく) (堂本)

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 41 号

発行日

2024.12.15

編集・発行

井上講四／堂本彰夫

※連絡先

〒901-2225

沖縄県宜野湾市

大謝名 3-13-24

教育協働研究所

～岳陽舎～

(井上講四宅)

Tel:098-963-9282

E-mail:

gakuyou17@outlook.jp

○「光る君へ」で想ったこと!!

明日(15日)で、今年のNHK大河ドラマ「光る君へ」が終わる!煌びやかな平安貴族の世、主人公の柴式部(まひろ)と大権力者藤原道長との妖しげな?男女関係を軸にして、本ドラマは展開してきたわけであるが、まさに、かの『源氏物語』は、そのような人間関係を生々しく描いたものであったということであろう(直接読んだことはない)ので分からないが?!!これまでの作品とは違うという、大方の評があったようであるが、「大河」自体が、昨今の新しい河の流れ?の中で、その存在意義を模索したということでもあろう(大石静という脚本家が、それに心えたということか?)!!

私には、それについては、これ以上何も言うことはないが(あくまでもエンタメであり、時代や登場人物の「大河性?」には、それほど拘りはない?)、今回は、予期せぬ情報を得たことだけは記しておきたい!言わば、新しい知識ということであるが、それは、天皇や貴族達の暮らしぶりということである。特に、書き物を巡る(読む)天皇や貴族達(女御を含む)の言動が面白かったが、書き物と日常の連続性(否、一体性?)がそこにはあったということである(本来、そういうものかもしれないが?)。これは、新しい発見である!!

他にも、幾つか想うことはあるが、ここでは、天皇の存在悲哀?みたいなものに触れておきたい。ただし、ある意味では、そのことは今日まで続いていることなので軽々には言えないが、そういう人間(お上)が、国の存続にとって、哀しい程に必要であったということである!!「統治」と「祭祀」の間(妙?)にあつて、自らの意思ではどうしようもない人生を送る!そういう存在であったということである!!

○慢心は、常に忍び寄ってくる?

話題としては、かなり過去のものとなったとは思われるが、過日、野球のプレミア12が終わった!残念ながら、日本チームは、それまで8戦全勝と、無敵の戦績を残し、改めての台湾との決戦(三度目)に臨んだわけだが、無残にも、0対4で完敗してしまつた!もちろんスポーツのことであるので、余程の力の差がなければ、まさか勝つたり、負けたりのこととなるが、何故か、この試合は、後味の悪いものであつた!

と言うのも、試合前の、ベンチ前での氣勢上げ?の様子が、試合中に流されたが、そこでの選手達の雰囲気、優勝するのは当たり前だというような塩梅に見えた!もちろん、リラクスのための盛り上げではあつたろうが、口上を述べていた選手の軽さ?に、私は、甚だしい違和感を抱いた!そして、案の定、負けた!もちろん、そのこと自体が、負けの原因だとは思わないが、どこかに奢り、高ぶりがあつたことは間違いないであろう!

要は、慢心は要注意ということでもあるが、本当に優勝したか?勝つたならば(したか?とは思わが?)、謙虚にかつしたたかに臨まなければならなかつたということである!!余計なことだが、その時に、誰か一人でも、そのことに気付き、みんなに告げていたならば、どうなつていたか?折角のムードを壊したくなかつたというところもあるが、そこが、どうであつたのか?一方の、台湾の方は、その一戦にかけていた(お金も!)!その違いは大きかつた?でも、選手達は、大きな財産を得た!慢心は、禁物であることを?だが、監督は分かつていた?

○「国社研」の変わりよう?その先を知りたかつた!

過日(11月30~12月1日)、日本生涯教育学会第45回大会があつた!もちろん、私は、ズームでの参加であつたが(もう何年も前から)、今回は、とても面白い発表を聞かせてもらった!なかでも、私が、35年前前後に勤務していた国立教育政策研究所社会教育実践研究センター(当時名:国立社会教育研修所/愛称「国社研」)の発表には、とても驚かされた!まさに、隔世の感、ここにありということであつたが、その取り組みには、甚大な意義と可能性を感じさせてもらった!

と言うのも、ここでは、現在「BrEJ」(ぶらーり)の「上野」というものが行われており、これまでは、調査研究や関係者の研修だけで、その機能を果たしてきたセンターが、その枠を取り外して、近隣の人々や学校(高等学校)と協力して、新たな役割を構築しようとしているからである!折角の機会でもあつたので、少し質問をさせてもらおうと思つたのであるが、時間がなくて、結局は出来なかつた(非常に残念である)!

要は、その取り組みが、いわゆる「国策(総合教育政策)」として、どのように波及していくのか?ということであるが、単なる、センターの生き残り策で終わるのではなく、同センターの研究・研修事業に、どう生かされるのかということである!ちなみに、そこ(地域学校協働活動)での大きな課題は、かの「教育課程」にどう絡ませるのかということであるが、それが、うまくいかなければ、学校側にとっては、負担の大きいものとなる(しかも、現在の学校側は、かの「働き方改革」の真っ只中であつて、そうしたヴィジョンを失おうともしている?)!だから、社会教育側が、どんなに熱意をもって協働、協力を呼び掛けても、迷惑な話となる!!そのことを克服するためにも、この動きは重要なのだ!

ということ、今回の学会参加では、改めて、様々な情報提供や示唆を受けた!現役をゆうに退いた身ではあるが、この恩恵?を、是非とも、今付き合っている人達に伝えたい方はない(特に沖縄の人達に!主として「教育協働アカデミー」を通じて!)!そしてまた、その辺りのことを、広く「新・教育協働への道」で語っていくことにしたい(目脚を気にしながら)!

(井上)

○「馴れ合い」と「折り合い」の「相合傘」？重ね傘？

久し振りに、外食（昼食）を兼ねて、馴染みの散髪屋さんに行った！その帰り道で、何故か、「馴れ合い」と「折り合い」の、それぞれの意味と違いのようなものを考えていた！まさに、まったくの暇高齢者ではあるのであるが、だが、その伏線みたいなものは、一応あった！それは、最近の、度重なる選挙（内外を問わず）の結果であるが、それぞれのリーダーを選ぶ際に、そこには、いずれも「馴れ合い」と「折り合い」の奇妙な関係があるということである！もちろん、理想的には、「折り合い」だけの方が良いわけであるが（最初から全真一致の結果はあり得ないし、あったとしたら、それ自身が、逆に危険なところ）、いずれにしても、今、その関係が、気になって仕方がないのである！

と言うのも、その関係が、実は、「馴れ合い」を表現・維持するためのものがあるような気がするからである！もし、そうであるならば、これほど哀しいことはない！しかし、残念ながら、ありそうである？しかも、その「相合傘？否、重ね傘？に嫌気がさし、その傘の中に入らない（入りたくもない）人も、多いのである！それが、秩序の維持・安定に寄与しているとも言えなくはないが、そこには、本当に必要な変革や発展は望めそうにない！得をする人はとことんそうなるし、そうでない人もまた、とことんそうでないことになる（格差社会の増大！）！

ならば、どうすればよいか？答は、簡単である！「本当の折り合い」の場や状況を、自らの手で、もう一度創り上げていくことである（反対や批判だけを、際限なく繰り返すことではない！それは、ある意味では、逆用されるだけである！また、それは、全体にとっては損益ともなる！）！「権威主義（国家）の横行」とか、「民主主義（国家）の危機」とか言われるが、その双方に言えるのは、ここで言う「本当の折り合い」がなされていないということである！人類（ホモサピエンス）は、「協働」によって栄えてきた！それは、まさに、「本当の折り合い」をなしてきたからである！

○今年の「新語・流行語大賞」に「ふてほど」！

私は、これについては、あまり関心はないが、今年の「新語・流行語大賞」に「ふてほど」が決まったそうである！「大手自動車メーカーの認証不正、パーティー券収入の収支報告書不記載など、一方、昨今強化されているのがコンプライアンス。企業は顧客・株主への社会的責任はもろろん、従業員一人ひとりにもハラスメントだ、働き方改革だと配慮が求められる。集団優先、滅私奉公で経済成長時代を生きた昭和世代にとってはまさにタイムスリップしたかのような激変…」この、昭和の時代に置いて行かれた感を笑い飛ばしてくれたのが金曜ドラマ『不適切にもほどがある！』。昭和の主人公が令和の社会で堂々と昭和のルール、人の道の原理原則を貫いて令和のルールに疑問符を投げかけながらも、対話することで物事を解決していく道を探る。時代がいつであれ、不適切なことは不適切なのだと教えてくれる。10月に行われた衆議院選挙、○○の選挙公約が「ルールを守る。○○方の公約がこれ。不適切にもほどがありませんか？」という「皮肉」も！

＜短歌に託して＞時と場所の違いに思いを馳せる…＜

・紫式部の心の内　とくと見せてもらった？
華やかなる光る君　今いずこ？

・慢心は　残念ながら　やつてくる？
それを制すが　真の仲間？！

・時代は変わった？！　されど変わらぬものがある！
それも気づけば　すく傍らに　！

・「馴れ合い」？「折り合い」？
ただ重ね傘？なら　「相合傘」とならず？

・「ふてほど」と　何でも略す　それ自体！
不適切とは　思わないのかな？

＜特別コーナー＞堂本彰夫の古代史旅枕④

○改めて、古代九州の全体像を探るーその12ー

しかるに、後者（益國）は、おそろしく、新羅系の「息長氏」や「秦氏」等が共闘して造り上げた「豊國倭國」（益國倭國の分國）後の「秦國」。中心は田川地域もがて宇佐を経由して、近畿に移動してあろう！そして、彼らの正当性（この場合は、これである）の根拠を示したのが、かの「武烈天皇」の悪逆ぶりであろうということである（あまりにも悍ましく、稚拙である！易姓革命だから、当然それは捏造である！ただし、それは、書紀のみの記述！古事記は、それ自体には同調していないところか？）！

すなわち、彼（武烈天皇）は、「応神王統」の最後の王とされ、その継嗣がなかったために、応神5世孫の「命江または北陸から招かれた」継嗣が、「あたかも継嗣したかのように？」示されたのである！だが、この皇統の承継物語は、明らかにおかしい！一つは、出身地（九州と近畿・北陸の二重存在）、一つは、「継体」の前身（本当は九州（益國）王統の継体）ということである！もちろん、二人の継体がいるはずもなく、そうであれば、そこには隠された真実（トリック）があることは間違いないのである！

そこでヒントとなるのが（その事績に被せられた虚構が、そこにはあるということである）、かの武烈天皇の在位期間とその結末である！しかも、かの「筑紫君磐井」が、倭の五王の最後の「武」の後裔であったとしたら、それは、かなり蓋然性の高いものとなる（例の「松野連系図」によると、「武」の次は「満」→「哲」（賢）→「別系」（禰）→「家系」（國）と続いているが、「哲」（賢）がその「磐井」と考えられている！そして、その後は、一地方豪族に堕している！）！

ただし、それは、かの武烈の在位期間（496～506年）と合わない！だから、「磐井」は、「武烈」ではない！であれば、そこには、さらなるからくり（嘘）があることになる！それが、記紀が示す（通説に言）「継体天皇」との関係ということになる！彼の在位期間は507～531年であるが、武烈の薨去年が506年とされているわけだから、当然そうなるが、問題は「継体」年号であり、その創始年（515年）である！明らかに、ズレがある（間）なのである（だから、消されてもざる！）！（つづ）（堂本）

＜編集後記＞　まさに、光陰矢の如し！あつという間に、残り半月となった！宮崎への旅も無事終わり（孫達は、それぞれ遅しゅうなっていたが、親達は大変そうであった！）、再び、いつものようなパソコン生活に戻った！沖繩も、随分寒くなってきた！（井上／堂本）

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 42 号

発行日
2024.12. 30
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○「一」「二」「多」…これは、何を意味するか？

一応、ここでは、令和6年の締めくくりということになるが、標記の「一」「二」「多」とは、果たして何を意味するか？ 今の私が（これまでもそうだが）、そんな大それたことを口にしよとは、ある意味不可思議千万ではあるが、あるネット記事に誘われて、ここで書いてみることにした！その記事によれば（今回は、直接紹介はしない）、今の日本は「内乱状態」にあるというものであった！「内乱状態」とは、何と物騒な表現かと思つて読んでみたのであるが、明治維新後と太平洋戦争後の、我が国の国情の推移が似ており（特に、外国との関係において、同じようなことが、再び起こるのではないかと、いうようなことであつた（多少、読み違いをしているかもしれないが）。

しかるに、「和を以て貴しとなす」とか、「万機公論に決すべし」とか、我が国には、このような民主主義の根幹をなす思想があるが（ただし、そうでなかったからこそ、それが希求、標榜されたとも言えるが）、（一党独裁でもなく、容赦ない二者択一の選択社会（二大政党制）でもなく、多くの人間（勢力）の意思が、可能な限り擦り合わされる社会（多党制？）が、今般の選挙では実現されたとも言える！だから、多少の混乱や遅滞があつても（ここが問題だと言え、そうなのだが！）、ここで言う「内乱状態」には当てはまらない？

否、まったくもつてそうなつてはいけないのであるが、問題は、これに対する、現状の、為政者やそれを選んだ国民の意識や覚悟？がどうなのかである！ただ単に、気がついてみると、そうなつてしまつていてというだけであれば、それこそが危ないのである？果たして、どうなのか？

○2度目の宮崎行！…この「かつやく」が絡む？

今年2度目の宮崎行については、先号でも触れたが、ここでは、少し盛つた？話をしておきたい。目的は、孫の「活躍」を見に行くということであつたが（小4三男の音楽会、高1双子のサッカー大会、もう一つ、別の「かつやく」が絡んだのである！前者は、親バカならぬ、爺バカ振り、ほんの少しだけ（本当である！）發揮してきたということであるが、繰り返しになるが、それぞれが逞しく育つていよう（上手かどうかはともかく）、とて、嬉しくもあつたといふことである。

だが、一方で、私には、もう一つの「かつやく」、つまり「〇〇筋」の不調が、終始付きまとつたのである（本当に大変であつた！）。最近、特に旅先では、常に悩まされるのであるが（下肢の不調も含めて）、そのことが、旅行や遠出に対する億劫感を募らせている！まさか、こんなことまで我が身に起こらうとは…高齢になるといふことは、まさにそういうことでもあるのであろう（自業自得と言われれば、それまでであるが）。

ただし、会場への行き帰りの昼食（懐かしい「山椒茶屋」のうどん／店名は覚えていないが、有名なラーメン屋でのそれ）とか、古代史関係では、帰路に立ち寄つた「瓜生野八幡神社」への訪問は、楽しい一時であつた（他にもあつたが！）。ちなみに、同神社は、典型的な八幡神社であつたが、観光客が行くような神社ではなかつた！しかし、この地には、何故か？かの「素戔嗚命の八岐大蛇退治」の説話があるのである（他にも、いくつもあるようであるが、九州ではこれだけ！）その理由を、知りたい！

○「眼」と「目」の違い…「書く」との意味？

ところで、先日（10日くらい前）、ふとしたことから、「目と眼」の違いは何かと思ひ、ネットで調べてみたら、「目」は形状から機能まで幅広く使われるが、「眼」は医学の専門用語と「見る行為」に特化される傾向にあるとあつた。そして、「目」「眼」はその形や外観（形状）から見るという行為、さらに「目」「眼」のことに関連する比喩表現まで幅広く使うことができる汎用性の高さの特徴がある」ともあつた。例えば、「見る行為」に關係する「形や外観（たれ目、つり目）」「見る行為（お目にかかる）」「見た印象（見た目、目つき）」「能力（目が悪い、目が高い）」「評判（世間の目）」「見る行為」に關係しない「形が目と似ている（台風の時、魚の目）」「区切りをあらわす（二つ目、二番目…）」「状態や性質（落ち目、焦げ目）」「体験（大変な目にあふ）」といった具合である（本当に、よく思いついたものである）。

一方、「眼」という漢字は、医学や生物学の専門用語以外でも使われるケースがあるが、『目』と比べると『見る行為』に特化した使われ方をする傾向がある」とあつた。例えば、「見る行為」に關係する「審美眼、観察眼」、「見る行為」に通じる「眼力、心眼、慧眼」といった具合である。なお、「医学や生物学上での『目』の正式名称は『眼球』。『目』という漢字は使いません。そのため医学や生物学での『目』に関する専門用語のほとんどは正式名称の『眼球』に由来する『眼』という漢字が使われる傾向」ともあつた（それは、そうであるう！）。

なるほどと、改めて思つたが、私は、「書くこと」は、ある意味「見ること」と同じではないかと思つている！だから、「眼」が重要だと！ただ、それが、今は、いわゆる「仕事」ではないこととが少し歯痒い？だが、それもまた、現在の私（達）に与えられた宿命と思つて、やっつけていく他ない！ある意味、それしか出来ないのだから！ただ、「眼」の生物学的機能は落ちる一方である！

ちなみに、脊椎動物の進化の過程では、「眼」が最初に備わつたのである。「世界を視る」ということは、原初からつきあひのある「特徴」（生存には必須！）だということであつたわけである。次が、「歯」と「顎」だそうである！（井上）

○「シンクレティズム」という言葉があった！

さて、こちら(堂本)の方も、少し、今年の締めめたいなものを書いておきたい！だが、それに相応しいかどうかは極めて怪しいが？ただ、ざーと考えてきたことであるので(以前少し触れたこともある)、ここで敢えて挑戦してみたいということである！と言うのも、本日(19日)、面白い言葉に出くわしたからである！何か納得させられるものが、そこにはあるということである!!

それは、シンクレティズム(syncretism)という言葉であるが、「融合、混成、ごたませ」という意味であるそうである(神仏習合の「習合」を、英語ではこう言うらしい)。「あまりいいニュアンスでは使わない」とあるが、我が国には、神仏習合も含めて、あらゆる場所に「神(八百万神)」が存在し(自然崇拜)、一方で多種多様な神社も建立されてきた。さらには、現在は、キリスト教も含めて、ありとあらゆる宗教が、生活の中に入り込んできている！何という無節操無宗教？そんなことさえ言われてもいるわけである!!

しかしながら、別な言い方をすれば、そのようにしていかねければ、「遠絶にして、小さな島国」では生きてこれなかった？そういうことであつたのかも知れない？言わば、生活(存)の知恵ということであるが、それが、縄文、弥生、古墳時代の人々に重層的に積み上げられてきた(それぞれ渡来人であるが、そのすべてが日本(人)をなしている!)ということである!!

ちなみに、その言葉の語源は、「『クレタ島の人』：エーゲ海に浮かぶ…現在はギリシアに属しているが、アジア、アフリカ、ヨーロッパのどこからも手ごとく場所にあるため、古代からさまざまな民族によって、とつたりとられたりをくりかえしてきた。強大な敵にそなえるためには、いがみあう勢力でも手をにぎりあうしかない。しばしばごたませ混成クレタ同盟を結成した歴史がある」ということらしい。

○「卑弥呼」と「聞得大君」！おそろくそれは、同じ!! (特別コーナー) 堂本彰夫の古代史探検④

上記とも関わるが、これもまた、折角であるので、ここ○改めて、古代九州の全体像を探る―その13―で触れておきたい。それは、沖繩(琉球)における太陽信仰では、その507〜531年に在位していたとされる人物(日記に言う「羅」)「聞得大君(きえおほみ)」のことである。彼女は、琉球王国の第「軍君/男弟王」である!! 彼は、同母兄の「昆支」と共に、九州倭国に国王と王国全土を霊的に守護するものとされた(そのため、主に王族の女性が任命された。琉球全土の祝女の頂点に立つ存在であり、命令権限を持った(ただし祝女の任命権は国王に)。また琉球最高の御嶽である斎場(御嶽)を掌管し、首里城内にあった十御嶽の儀式を司った。「琉球研究の泰人質として倭国に送り込まれていた」ということである!! その意味で、百済と斗・鳥越憲三郎氏は卑弥呼と男弟の統治形態を見て卑弥倭国は一体化されていたということである(だから倭の五王達は「百済」への呼の統治形態を琉球国の聞得大君と国王のような祭政の軍事統治権を執拗に主張した)!!

!! 「ヒメ・ヒコ」制とも言われるが、かの邪馬台国は、こうした統治・祭祀形態であったということである!!
・「二」「三」「多」 考えてみれば
人の世の基も、すべてが絡む!
・孫の成長 楽しみだが 他方で気になる
我が娘達!! 親となろうとなかろうと!

・目と眼 生物学や医学はともかく
それに託す言葉 様々にあり それは何故?
・シンクレティズム 語源はともかく
生存の知恵? だがいずれも 眼まがなす?
・卑弥呼に悩まされる 我が国の古代史?
案外その答えは 沖繩にあるのかも?

ちなみに、倭王「旨」は、倭の五王の中に入っていないが(途中、本國へ帰っている)、一時期、筑紫倭国の大王となっていたようである! 要は、彼は、百済からの「人質」として「筑紫倭国(筑後大善等)」に送られていた、仇台系王族の「昆支」と考えられるのである!! また、実弟の軍君/男弟王(牟婁)まさに、彼が「継体天皇」とされた!! も、その分国としての「豊國倭国」に人質として送られていたということである!! (つづく) (堂本) (編集後記) 今年も、あと一日で終わる! 6回目の年男であったが、娘・孫達や友人との再会も含めて、ほとんどいつもと同じだったように思う。ただし、身体の衰えは、着実に進んでいる! 来年はさらに、それが顕著とはなるであろうが、自分なりに頑張っていく他ない! とにかくみなさん、よいお年を! (井上/堂本)

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 43 号

発行日 2025.1.15
編集・発行 井上講四／堂本彰夫
※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ~岳陽舎~ (井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail: gakyuou17@outlook.jp

○新年に想つ一月日は百代の過客!!

今日は、新年の5日であるー再び、この「新通信」を書き始めようとしているが、やはり何度も、ありきたりの新年の挨拶みたいなもので始めるのは、何か味気ない(芸がない?)!!そこで思いついたのが、かの「松尾芭蕉」の「月日は百代の過客」である!正確には、「月日は百代はくたいの過客かか」にして、行きかふ年もまた旅人なり『奥の細道』冒頭文)であるが、その意味は、「月日は永遠の旅人であり、過ぎては訪れる年もまた旅人のようなものである。」ということらしい(ウィキペディアより)。

言われてみれば、まったくそのように思うが、よくよく、その心境が分かるようになったということかもしれない!!否、まさに、そうなのだと思うということであるが(ただし、芭蕉は、50歳で亡くなっているようなので、私の方が、遥かに高齢者なのであるが!)、驚いたことに、彼は、これもまた、かの有名な「西行(法師)」を崇拜していたらしい(さもありません?)!であれば、句(歌)の「わび、さび」はともかく、彼らは、「無常」とか、「儚さ」とか、人生の蘊奥(悲哀?)を等しく見つめていたのではないかということである!!人(特に晩年)の世とは、まさにそうなのだということである!!

いずれにしても、私もまた、そうした月日の流れの中、「私の旅」をなしているわけであるが、残念ながら、私の場合は、それを彩るものがない(あったとしても、徐々になくなっている?しかも、ここで彼らを持ち出すことには、多くの人から顰蹙を食らうであろう?)!!

○変わってはいいるが、変わっていないものもある!!

さて、上の流れと一緒に流れていくが、今年もまた、私は、ここ沖縄の我が家を迎えた。以前(二期ではあるが)は、宮崎の長女一家の家で、次女・三女も駆けつけて、慌ただしい、そして騒がしい?(孫3人)新年を迎えていたが、それこそ時の流れで、今年のようなスタイル(次女・三女も沖縄へ)になっている次第である。本当は、長女一家も、この地に戻り(ただし、彼女らが育った家は、ここではない!)、新たな年の第一歩を踏み出していることであるが、それは、現実的には難しいということである(長女は、別な家族をなしているということである!)。

それはともかく、ここで書いておきたいことは、娘達が帰ってくれば、何かと昔のことを思い出して、東の間の親子(父と娘)関係を、無理矢理演じようとしている自分(父)と娘(母)の関係が、互いに年を取り、年を積み重ねていることは事実ではあるが、その意味では、いつもと変わりはなくとも言えるのである!!

しかも、正月の場合は、最寄りの「普天間神宮」に初詣に行くのであるが、近場の駐車場から歩いて行き、着くと、拝礼・祈願、破魔矢・お守り・おみくじ(娘達だけ)の買い、干支看板の前での記念写真、そして、帰りの参道での「綿菓子」買いと、まるで昔のままなのである!ちなみに、綿菓子買だけは、流石におかしいとも言えるのであるが、変わらぬ関係(光景)を意図的に懐かしんでいるとも言える(次女・三女達も、そう思っている?)!!

○年賀状哀歌?なかなか切れない遣り取りの縁!!

ところで、私は、一昨年の古希の時、年賀状を出すことを基本的に止めた(親類、限られた友人・知人を除いて)。もちろん、いただいた賀状には、可能な限り返信はしているが(短くても、自筆のあるもの。ただし、卒業生のそれは、すべて返信している!)、もうこの人とは、形式的な遣り取りは止めたいのであるが、なかなかそうもいかない現状ではある(今年も、何通かはあった!)。だが、いずれにしても、この年賀状というものは、自分のこれまでの生きてきた証しではある!普段は、ほとんどの人のことなどを忘れて、目の前の雑事、人間関係にかまけているわけであるが、いざそれを受け取れば、この人とは、あの時、あんなつき合いがあった!そして、お世話にもなった!そういうことを思い出すのである!だが、月日が流れ、その時々々の関係は、ほとんどなくなってしまう!しかも、住む場所、働く場所が変われば、そして、その働く場所さえもなくなってしまうれば、その関係、そのつき合いは徐々に薄れ、消え去ってもいくのである。それが、人の世の定めなのである!

翻って(この言葉、久し振りに使うが?)、最近よく「断捨離」ということが言われるが、こと「人間関係」においては、なかなかそうもいかない?どんなに懐かしいものであっても、いわゆる「物」であつたならば、自らの意思で(断腸の思いで?)、一方的にその関係は断ち切れるのであるが、「物思ふ」人間であれば、そうはいかない?もちろん、先方も、そう思っていることであろう!!ある意味、それでよいのである!だが、いずれにしても、そうした遣り取りは、やがて、自然な形で消滅していく!!最後に、H県在住のKさん(88歳、わざわざ書いている)から、「お元氣でお過ごし下さいませようお祈りします。」「先生、私共が心血を注いで来た社会教育とは一体何だったのかの心境です。」という、手書きの文を添えた賀状を頂いた(正確には返信?)。実は、このKさんからのものが、ここでの書く動機となっているのであるが、人には、誰かに、最後に言いたいことがあるのである?本当に、Kさんにはお世話になった!Kさんは、教員出身の人である!

(井上)

○「多層重複近似構造」！表現は硬いが正鵠を射ている!!

新年の冒頭に当たって、(ここ)でどうしても書かなければいけないことではないが、忘れてはいけないので、そして、今の私(堂本)にとつては、とてつもなく重要なこととなるので、以下、急遽書き留めておくことにする。それは、他ならぬ、私の古代史研究(「旅」と称しているが!)に関わることであるが、最近とみに増えた、Uチューブ視聴からのアイデアである!実は、そこに、とても刺激的で、興味深いチャンネルがあるのである。それは、「ふどきさんの古代日本史考」というものであるが、多種多様な類似の動画と違って、本当の古代史が解明されるのではないかと思

わせるものなのである(ひよつとしたら、これまでの定説を大いに覆すものとなるかもしれない?ただし、難解ではある?)!!
しかるに、彼は(多分男性?)そして、比較的若い?、自らの古代史解明の手法(視点を、「多層重複近似構造」(の発見)という名称で、「記紀」に示された史実?を、全体的、総合的に解き明かそう(暴(こう?)とされているわけであるが、まさにその手法(視点は、私が、徐々にその思いを深めていたことと符合するのである(もちろん、私のものは、曖昧な感觸の域を出ていなかったが?)!ここでは詳しくは述べられないが、要は、「記紀」は、かの「纏向(遺跡)」時代(3世紀前後?)を始点にして創り上げられているのではないか?そして、それ以降の史実?が、「神話(神代)」と「歴史(人代)」へと、言わば二層拡散的に振り分けられているのではないかと(ここ)である!!

もちろん、それは、国の創始を古く見せるためでもあつたろうが、そこには、もう一つ大きなからくりもあつた!!それは、最も分かりにくい(だから重要であつた?)「倭の五王」前後の真相(空白の4世紀)等を、「神話」に託して描いているということである!!全くの「他人の種」で旅を続けている素人の私が、こう言うのも、どこか恥ずかしい(当人にも申し訳ない!)のであるが、本当に正鵠を射ているのではないかと、共感、賛同している次第なのである。

○太陽/月/星、そして、龍蛇/鯨/熊/犬神信仰!

先号(42)とも関わるが、(ここ)では、もう一つ、書き加えておきたいことがある!それは、古代における「太陽/月/星」等(自然崇拜、そして、「龍蛇/鯨/熊/犬」等(トーテム信仰)に関わることである!これには、おそらく古代氏族の「和珥(た)族」や「鴨(た)族」も加えてよいであろう!!いずれにしても、何故、古代の人は、このような信仰をもつに至つたのであろうか?特に、後者の、動物に対するそれが、よく分からない!!

ちなみに、「アニミズム」と「トーテム」の大きな違いは、トーテムが集団や個人とトーテムとの神秘的な関係を信じるものであるのに対し、アニミズムは生身のもの、無生物のすべてに明確な霊的本質があると信じるものであることである。とあるが、不思議なことに、私には、後者の方は、よく分かるような気がする!問題は、前者の方であるが、少なくとも、その動物(トーテム)は、自分達の生活(生存?)には、どうしても欠かせないもの(者?)であつたことだけは分かる!!

・短歌に託して再び、変わらぬ?新年を迎えて!!
・月日を旅人と詠む その人もまた旅人ぞ
だから思い出さへも 旅となす
・変わつてはいるが そうではないと思いたい
その証としての 綿菓子買い?
・賀状に絡んだ それぞれの生
その意味分り合える 老いであれ

・「多層重複近似構造」? 難しそうであるが
隠された真実は そこにあるかも!!
・自然はともかく 何故動物にまで?
神秘・霊的本質・象徴 人はそこに何をみた?

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕(49)〈

○改めて、古代九州の全体像を探る―その14―
いやはや、とんでもない史実?にぶち当たってしまったようである!!要は、3世紀末以降の邪馬台国連合後の倭国九州の実態は、神功皇后、武内宿禰、仲哀天皇、そして応神、仁徳と続く(足彩られた?)虚偽?の王統の時代、すなわち、「混乱」、そして「空白の150年(4世紀後半~5世紀)」、さらに、そこから生じた「倭の五王時代」、そして、その最後の「武」の後の「筑紫倭国」と「豊国倭国」の分離・分立、さらには、筑紫倭国の王統交代(豊国倭国の近畿移動と、本当に目まぐるしく変転している!!)しかもそこには、中南部九州の熊襲(球磨會志)系勢力(紀姫/木/貴?)氏「目下部氏」「久米氏」、さらには「多氏」、そして半島からの新羅、伽耶系勢力、その後の百済系王族の流入・渡来が絡んでいるのである!!

そんな中、まだまだ仮説、否、それ以前の状態かもしれないが、とにかく、6世紀前後に、新たな大きな枠組みが成立するということになる!!
うことである!!だから、さらなる問題は、そこにおける筑紫倭国と豊国倭国の並立と相剋の史実を、一方の近畿・大和の変遷を絡めて、いかに具体的に描くかということになる!!何故なら、真の建国史は、まさにそうした視点からしか描けないからである(「記紀」は、単なる九州王朝史のパクリではない!!ということでもある!!)!!そこで、その解明の糸口になるのではないかと

思われるのが、「辛亥の変(531年)」というものである!!すなわち、それは、かの「継体天皇」の墓去記事(「日本書紀」)に関わつての、「日本の天皇及び太子・皇子、俱(とも)崩(たふ)れりましぬ」(「百濟本紀」)というようなことである(それには、怪しげな投げかけまでが行われている!!)!!
とすれば、そこで亡くなったのは、新生(分家の)「豊国倭国」の王族(「軍君(男弟主)」と、その子(五郎)「寛化」)だったのかもしれない!!しかも、その太子・皇子を弑したしたのは、異母兄弟とされた「欽明天皇」だった(それが辛亥の変?)?そして、その「欽明天皇」(実母蘇我稲目が?)が、大和で「上宮王家(蘇我王権)」を確立した!!まあ、そういうことでもあるが、とにかく、(ここ)では、かなりの政変があつたことは間違いない!!(ここ)である(そう考えれば、前後の辻褄が合う?)!!(つづく)

〔編集後記〕 過日、新年が明けた。どんな年となるのか?敢えて書かないが、確実に日々は訪れ、去っていく!!それに随伴しながら、関わる思いや意味を綴っていく他ない!! (井上/堂本)

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 44 号

発行日 2025.01. 30
編集・発行 井上講四／堂本彰夫
※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ～岳陽舎～ (井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail: gakyuou17@outlook.jp

○これは、書かずにはおられない！まだまだ脈はある？

○やはり、これは、上だけでは収まらない！

あつという間に、一月が過ぎるが、先日(18日)突然、これは是非書いておかなければと思わせるテレビ番組があつて書いた。ある意味お馴染み？の「新プロジェクトX」挑戦者たち「この国には、誰にも知られず輝く人々がいる。」であるが、今回もことあるが、私に、遠い昔の？H大学での助手時代を見出しには、「緊急派遣5千人日本メーカーの総力戦」タイ思い出したのである。詳しいことは、ここでは書け(か？)大洪水国境を越えた復旧劇」とあつた。もちろん、これだけではないが、私の所属する研究室(比較教育制度学)は、当時よく分からないう！ネットを見てみると、

「メードインジャパンを支える心臓部が巨大洪水で水没！そ学生(大学院生)が沢山いた。その中に、タイのWさん一 のとき、生産を守るために立ち上がった人々がいた。20 家もいたが、自分で言うのも烏滸がましいが、精一杯の 11年10月、タイ中部を襲った洪水は被災230万人。半お世話をさせてもらった！互いに家族持ちという境遇が 導体から家電、自動車まで日系400社以上の工場が生産設 そうさせたのかもしれない(貧乏所帯にも拘らず)。

備ごと水に沈んだ。そのとき工場のリーダーたちは、生産設 彼らとの思い出は、今でも幾つか残っているが、ある 備を水中から引き上げ、5千人のタイ人従業員とともに日本 時、旦那さんが一足先に帰国していたので、残された奥 へ派遣、生産を再開させる、前代未聞のプロジェクトに挑ん さん(彼女もまた院生となっていた)と娘さん二人を、夏休 だ。国境を越えた物語。」とあつた。

で、番組の紹介としては、これでよいであろう！だが、私 愚に連れていったことがある！義父母は驚いていたが、 は、現地工場の日本人社長やジェトロの担当者人間性、そ 最後の夜に、件の奥さんが、自国料理を作って、感謝の して現地労働者との絆、改めて、そういうものに注目したい 意を告げたことを覚えている(今回は、そのことを思い出さ のである(何とも感動的なのであった！)。余計なことかもし せてくれたのでもある！)。帰国後の彼らのことは、ほとん れないが、この話(映像)は、今の日本人(否、世界中の人々) ぞ知らないが(家族としては？であったようだが)、本当に掛 け値なしに、人間対人間として付き合ったものである！

しかるに、日本は今、政治・経済・教育等の面で元気がな い？しかも、以前まではうまくいっていたものが、そうなっ が助手だからということではなく、目の前の現実におい ていない？だから、自信喪失ともなっている？だが、この話 て(私も、その時は一児の父親であった！しかも、一年とい うに出で来る日本(人)の良さ、外国(人)との関係を知ると、 限定での助手生活であり、将来の見えない不安定な身分でもあ まだまだ脈はある(自信回復できる？)？そう思うのである！ った！、極自然に振舞っていたということである！

○改めて、「成人式」に思う！イニシエーションの意味？

さて、もう随分日数が経ったが、今年もまた、各地で成人式が行われていた。私は、その様子をテレビ等で見ていたのであるが、相変わらずの晴れ着姿(特に娘さん達の！)と、新成人としての決意(心構え)を告げるコメントを眺めていた。そこには、表面的にはいつもの？、平和な日本が映し出されていた！必要以上に、事を深刻に受け止めることはないであろうし、たとえそうであつたとしても、この日ばかりは、彼らの輝かしい門出を祝うことは、それなりに許されることであろう！痛ましい事件や事故、あるいは悲惨な戦争や災害等が、国内外で相次ぐ中、そうした光景は、ある種の癒しであり、束の間ではあるが、社会の安寧を感じさせるものでもある(多少、無理矢理感がないわけではないが？)。

ところで、あるネット記事(新聞記事)によると、「かつて『荒れる成人式』として話題になった〇県(敢えて伏せる！)の多くの自治体で12日、『成人の日』の式典が行われた。県は『さまざま取り組みが奏功し、近年は落ち着いている』(担当者)とみているが、〇市(これも、敢えて伏せる！)の式典会場ではこの日、改造車やバイクの爆音が鳴り響く一幕もあつた。全体から見ればごく少数ながら、奇抜な髪形や衣装が目を引く「やんちゃ」な若者は今も健在のようだ。」とあつた。確かに、そう言われれば、そうなのであろう！「やんちゃ」な若者」は、いつの世にもいるのであるから!!

そこで、思うことは、その「やんちゃ」についてである！我々は、かつて(今もそうなのかも？)、「若気の至り」「若者気取り」「身の程知らず」とか、よく若者(青年)の傍若無人ぶりを評してきたものである。そうした中で、「成人式」は、彼らの力や勇気の誇示、大人社会へのイニシエーション(通過儀礼)の場であつたが、豊かな社会(都市化社会)では、その要素がなくなっている(地域／コミュニティの変質)!!ちよつと変な話ではあるが、沖縄でいう「うーまくー」(やんちゃの子)の卒業の場が、それになつていたら、それはそれで意味があるのかもしれない!!現象的には、甚だ厄介(迷惑?)ではあるが、皮肉にも彼らだけが、それを継承(内在化)しているのかもしれない？(井上)

○「ユニバース25」？それが指し示すものは？

今度は、私堂本の番であるが、標記の「ユニバース25」について、以前書いたことがある(第35号)。実は、過日、それを紹介していた、NHKの「フロンティア」という番組の再放送をみたのである。そこでは、改めて、人類繁栄の原因(原動力)が、「協働性」にあることを確認したが、後半にあったある実験のことは、ほとんど忘れていた!!それは、J・B・カルブーンという動物行動学者が行ったものであるが、人口密度とそれが行動に与える影響についての研究である。彼は、げっ歯類(ラット)の過剰な個体数が及ぼす悲惨な効果が、人類の未来にとって悲観的なモデル(最後には絶滅?)であると主張していたそうである!

その有名な実験が、件の「ユニバース25」ということであるが、その中で、彼は、ラットの、過密状態での異常行動を「ビヘイビア・シンク」(生物個体の過密状態による行動の崩壊)、社会的な相互交流を諦めた受動的な個体を「ビューティフル・ワン」と名付け、それらの個体の行動変容が、結果として、彼らの絶滅をもたらすということを見つけていた(詳しい説明はここでは出来ないが)。ただし、彼は、こうした実験を人類に当てはめれば、滅亡が確実だと考えておらず、建築的環境の改良による「人間福祉」(Human welfare)の改良を目指したということである。そして、その研究は、「世界的に認知されるようになり、彼は世界中の会議で講演し、NASAや地域の刑務所の過密状態のコロンビア特別地区委員会などのさまざまな組織から意見を求められていた」そうでもある。

しかるに、彼の研究は、E・T・ホルルの「ブロックセミックス理論」(人の個人的距離や社会的距離を著した理論)の基礎として用いられたが、当時から生物学者や生命学者から疑問や批判を受けており、現在では科学的証拠や客観性が不足しているとも考えられているそうである。だが、爆発的な人口増加を進めている我が人類のあり様が、そこから見えてくるような気もするのは私だけであろうか!!

○「偽善と露悪」の繰り返しだが、「偽悪」もある？

「こ」でも、あるネット記事(Breese)からのものであるが、面白い表現(捉え方)に出会った。それは「露悪」というものであるが、人間社会の歴史は、その「露悪」と「偽善」の双方の繰り返しであるというものであった。現在、「損得勘定、分かりやすい合理主義や行き過ぎた資本主義」が横溢する中で、「日本は世のため人のためという価値観が根強く、子や孫の世代、あるいは先祖、さらには世界の人々をも思いやることのできる『美しい国』だったはず...それは偽善的だったかもしれないが、真実とは結構歯切れが悪く、曖昧なもの...その曖昧さも含めて、他を思いやり、美しく生きるのが日本人の伝統であり美意識だった...そこが外国から敬意を払われる部分でも...」とあったが、利己主義と利他主義の相対の中で、人間社会(日本)は、まさに偽善と露悪の繰り返しを行っているとということであった。そうかもしれないが、その双方に違和感を感じ、自らを「偽悪」と言うことで生きていた若者達が、かつていた(今もいる?)ことを忘れてはいけない!

・誰にも知られず輝く人々!
そうなのだ! そういう人達がいるのだ!

・思い出したいものもあるが
そうでないものもある! そを教えてくださいませんか?

・成人式! 単なる儀式ではあるが
東の間の己を それに賭ける者ある!

・ユニバース25 不吉な実験とも言えるが
そこに真ある? ならばどうすれば?

・偽善と露悪の繰り返し? そうだととしても
若き日の偽悪もある? それは何?

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕(4)

○改めて、古代九州の全体像を探るーその15ー
というのも、「記紀」に示されている継体王統は、それを「継体」したとする(5世孫と云ふことはあり得ない)。「応神王統」の後継王統である!そして、彼らは、その応神王統の最後の王、あの悪名高き「武烈天皇」の暴虐ぶりを示して、自らの正当性(辛うじての正統性?)を主張している。中華の歴史にはよくあるパターン、易姓革命思想(1)ということ、前号(2)では、さらなる大変な展開となってきたが、改めて、彼「継体/真君/男弟王」は、かの第25代百濟王「武寧王(斯摩)」の(義?)叔父であり、その彼(斯摩)から、有名な「隅田八幡人物画像鏡」(現在、和歌山県橿原市の「隅田八幡神社」に所蔵)を贈られているともされている(1)の辺のことは、またまた詳しく説明されなくてはならないのであるが、要は、「継体」という人物(天皇)は、かなりの謎(矛盾?)を秘めているということである!

しかるに、『中歴(九州年号)』から推測される「武烈天皇」とは、本来の?「継体天皇」の別称でもあるとされているようであるが、先の(1)との絡みで言うと、彼は、記紀に言う「継体天皇」と「物部麁鹿火」によって政權を簞簞された「筑紫君磐井」ということではないか?もちろん、その場合、「武烈」は、正統な王統であった「磐井」の虚像であったということになる(1)つまり、「磐井(武烈?)」は、貶められて当然の「暴君」であったということを手張(捏造)したいがためである!!

でも、「磐井」自体は、「武烈」ではなかった!何故なら、「磐井」は、『宋書』に見られる「武の後裔(彌子?)」と見られるが(かの「松野連系図」には、共に名があり、磐井に相対する人物には、「哲」という名が与えられている)、かの八女地域(宮内山古墳等)に、別途安定した王権を営んでいた!問題は、いつどのよう、その九州倭国が変貌していったのかである?考えられるのは、徐々に、その勢力を増していった「豊国倭国(筑紫倭国)の分國、台島の類族達?」中心地は、田川(香春神社周辺)→「秦王国」?後に、京都や宇佐地方に移っていった(1)の動きからということである!!

『編集後記』 今回の新年も、あつという間に一月が過ぎようとしている!多分に漏れず、ここの沖縄も一番寒い冬を迎えているが(多少笑?)、来月は、プロ野球の春季キャンプが各地で始まる!運動を兼ねて可能な限り訪れたいが、来客(卒業生達)もある!私達にとっての蠢動とも言える!!
(井上/堂本)

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 45 号

発行日
2025.02. 15
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○シンギュラリティ（技術的特異点）が近づいている!!

新年も一月が過ぎて、まさかこんなことを書くこととは夢にも思わなかったが、実は、迂闊にも？とんでもない言葉に出くわしてしまった！それが、標記の「シンギュラリティ（技術的特異点）」というIT用語である。昨今のAIの爆発的な進展について、一度は私なりに考えてみたいと思っただけ、ここに書き始めた次第であるが、だが、実際は、私には、まるで異次元の世界のことのようである！だから、その言葉は、何か未来の人工怪獣みたいな名前のようにだとも思ったが、意味（定義）は、「人間の知能を超えたAIが誕生する仮説のこと、AIと呼ばれる人工知能が、日々学習を繰り返して、いつの間にか人間を上回ってしまう？その時点」ということらしい（それが、2045年とも！）。

そんな馬鹿な？と、旧世代の私は改めて思うのであるが、「とくに、近年では人間との会話が成り立つチャット機能や、精度の高いイラストを作成するクリエイティブ機能が発展しており、ますますシンギュラリティへの関心が高まっている」とある！さらに、「テクノロジーというパワーと莫大な金を手にした、テックビリオネアたちの野望には限りがない。こうしたイノベーションはもちろん素晴らしい。しかし懸念されるのは、政府の介入や規制を嫌い自由を最高の価値とするリベタリアン的な考えを持つ彼らが、『置いていかれる』人々のことを全く考えていないということだ。」ともあった（ネット情報より）！さらに、それが先鋭化している？

○久しぶりの再会！だがそこに世話人がいればこそ！

過日（二日）、久しぶりに、卒業生達（子ども地域教育コース一期生4人：男1人/女3人）が、我が家を訪ねて来てくれた！この若者達は、比較的最近の卒業生達で、神奈川県に住むS（旧姓K）さん（小学校教員）が、家族（夫と子ども1人）と一緒に沖縄に来るのをきっかけに、県内在住の同期3人に呼びかけたようである。なお、4人のうち3人は、子連れでの訪問であったので（乳幼児が4+0.5?）人、さしずめ我が家（岳陽舎）は、ミニ保育所状態であった。余談ではあるが、ある事情で気になっていたF君も来た。しかも、一児の父親として！彼とは、また近いうちに、再会することを約束した。

いづれにしても、時は流れたものである！考えてみれば、彼らの生活状況も、そしてまた生活意識も、目まぐるしく変転し、当時の学生生活とは違って、大変な日々を送っていることであろう？今月もまた、別の（こちらはいつもの?）卒業生達が来る！嬉しい（否々、有難い?）ものである（もちろん、まったく音沙汰のない卒業生達もいる！）
ところが、当然ながら圧倒的に多い?。ちなみに、先月末（18日）、これまた久しぶりに、高校の同期とのズーム交流を行ったが、11月に沖縄で集まることになった！
どんな再会となるのか、楽しみではあるが、とにかく、旧知の人と出会えるのは嬉しいものである。世話役のKさん（福岡在）は、毎回、このような場（旅行）を企画・調整してくれる人であるが、やはり、そうしたアクティブな（呼びかける）人（世話人）がいないと、こうした再会
は実現しない！本当に、感謝の一言である！

○こんな凄いことをやっている所がある！そこにはやはり、

ひよんなことから、ある情報を得ていたが、調べてみると、大変なイベント（否、それを遙かに超えている）であることが分かった！それは、「Kumamoto Education Week」というものであるが、その内容は、「教育DX」をはじめとする『学び』にまつわる様々なテーマでのトークセッションの開催や、学生や民間企業と連携した若者の居場所づくりの取組紹介、アーティストやユーチューバーとのコラボ企画、民間団体との連携による体力向上プログラム紹介など、企業・民間団体・大学等と連携した取組で、『YouTube 動画50以上、対面イベント20以上、計70以上のプログラム』である（実際は、それ以上）。目的は、『Well-beingを実現するための教育について多様な社会の参加者と共に考え、行動することで世界の教育振興に貢献するため、『みんなの夢が未来を創る』をテーマとした教育の祭典』ということである！

ここで力説したいのは、これを実現させたE教育長と、Oさんという「人」の存在である！E教育長さんについては、興味があったので、これも事前に調べていたのであるが、その経歴が、真に仰天もの？詳しいことは書けないが、以前熊本県教委の社会教育課長もされた、元文部官僚（途中で起業された）であった。「子どもの『将来のために』が引き起こす教育の盲点、今の幸せのため自ら考え行動する教育委員会へ。『主体的・対話的で深い学び』によって、はたして予測困難な時代を生き抜くことができるのか。まさに予測困難な時代の象徴ともいべき新型コロナウイルスの感染拡大に直面して、『今後子どもたちはこのような時代を生きることを体感した』。コロナ前とは教育に対する考え方が大きく変わった。今後どんな学校、どんな教育を目指しているのか。矢継ぎ早に施策を打ち出す熊本市の改革」という評もあった。一方のOさんは、根っからの市職員で、社会教育畑で長年奮闘されてきたという。結果的に、この両者の出会い（タッグ）が、この凄い取り組みを実現させたということであるが、沖縄の2人がそれに協力していることもあって、過日（5日）、彼に、[Kumamoto Education Week]にも参加してもらった。素敵な公務員であった。やはり、そこには、「人」がいるのである！（井上）

○「DP」とは何だ？思い当たらないわけでもない!! ○世界は錯覚で出来ている？AIは、それにどう対処？

これまた最近、ネット上で気になる(本来の意味で?)言葉がある。それは、「DP」、すなわち「ディープ・ステート deep state」(闇の政府、地底政府)という言葉であるが、多少調べてみると、「アメリカ合衆国連邦政府の一部(特にCIAとFBI)が金融・産業界の上層部と協力して秘密のネットワークを組織しており、選挙で選ばれた正当な米国政府と一緒に、あるいはその内部で権力を行使する隠れた政府(国家の内部における国家)として機能しているとする陰謀論である。『影の政府』と重複する概念でもある。」とあった(ウィキペディアより)。

もちろん、ここには、その用語の歴史的背景や、米大統領のト氏に関わるような政治状況(陰謀論の有無)に、直接コミットする気はない(そもそもよく分からないし、分かりたくもない)。ただ、それに関するようなこと、例えば、「既得権益」を巡る攻防?あるいは、与党(保守)対野党(革新)というような文脈であるならば、それは、何も米国だけの話ではないし、どこの国でもあることであるので(ひょっとしたら、どこの組織でも)、私(堂本)なりに、そのようなことに思い当たらないこともないのである!!

ただ、問題は、その攻防において、何らか(誰か)の裏(影)の意思が働いて、その渦中にいる人間が、ある事件のために(テーマやキャンダルを含む)、その表舞台から退場させられることがあるというようなことである!!これもまた、そのDPの仕業であるということであれば、話は別である!!要は、そこに、誰かの思惑が絡んでいるということであり、既得権者や、その事案がそうなって欲しくないと思っている人間達の、言わば「暗黙のタッグ(見えな鎖?)」が、そこに出来上がっているということである!!

○改めて、古代九州の全体像を探るーその16ー

翻って、その「豊国倭国」を支えていた「皇長氏」や「秦氏」等は、一方、近江・北陸等に本拠地を移し、琵琶湖・淀川水系を抑え、(豊国)倭国のレガシーを引き継ぎ(継体)、(男大迹)彦(彦本尊)を「継体天皇」にすり替え、その王権を確立したように見せた!!だから、彼らは、書紀の編纂(史実の捏造)に積極的に関わった!!ちなみに、「皇長氏」の姫巫女である「神功皇后(皇長善姬)」の英傑物語は、それを大いに盛り上げるための所業でもあった!!

ということ、我が国の古代史(建國史)は、まずは北部九州に確立された「倭国」が、西日本全体(影響としては関東にも及んでいる)を舞台にした「倭国大乱」によって、一極分化していったことから始まる。初因は、伊都国と「邪馬台国」による「倭国」への攻撃!!すなわち、北部九州での覇権争いに敗れた「倭国」勢力の主流が、吉備や出雲に移動、そして、当地の勢力を抱き込んで近畿大和(畿内)に移動し、新しい連合勢力を構築し(連合京都市)、他方では、その一部勢力(権力争いに敗れた多民族)が、新たに形作られていた邪馬台国(理合)に徐々に入り込み、北部九州(筑紫後方)には、言わば「新倭国(筑紫倭国)」が形成された!!

そして、その後、その「新倭国」は、6世紀前後に、筑紫倭国(本家)と豊国倭国(分国)に分かれ、さらにその後、豊国倭国は、筑紫倭国(本家)と快を分かち、移動して、「近畿倭国」として、旧来の勢力を糾合し、新たな別(新倭国)日本国を創り上げた!!それが、かの(「記紀」が不す)「継体王朝」であり、その後の顛末ということである(本来的には、現皇統は、そこから始まっている!!)!!その意味で、我が国の古代史(建國史)は、「筑紫倭国と豊国倭国」の並立と相剋という意味合いをもつということであるが、ただし、それは、あくまでも近畿倭国(倭国)新倭国(豊国倭国)日本国からの説明軸であり、消された(隠された)筑紫倭国(本家)の実相、そしてその後の推移については、ほとんどが知らされていないというところなのである!!だから、問題なのもある!! (つづく)(堂本)

編集後記 義母(101歳)の死の連絡があり、急遽鳥取に行っていた。親族が一堂に会するのは滅多にないが、これもまた人の世の習い、絆を改めて感じさせてもらった。中国山地の山間の町には、かなりの雪が残っていた! (井上/堂本)

- ・予想外の保育所状態!
- ・それにしては 時は過ぎたものである!
- ・怪獣を思わせる シンギュラリティ?
- ・ある意味それは 当たっている?
- ・とにかく凄じいことが 起きていた!
- ・やはり事は 人が起すのである!
- ・ディープ・ステート? 何でそのようなものが!
- ・善なるそれは あり得ないのか?
- ・錯覚があればこそ 生きられる?
- ・であればAIは、いかに人脳越える?

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 46 号

発行日 2025.02. 28
編集・発行 井上講四/堂本彰夫
※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ~岳陽舎~ (井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail: gakyuou17@outlook.jp

○学生寮は、良くも悪しくも？飛躍のための時間・空間！

これまで、ここでは「あくまでも自分史として」という副題を付けているにも拘らず、自分の過去、とりわけ若い頃のそれをあまり書かずにしたが、あるテレビ番組のお陰で、少しは書いてみようと思いはじめた！それとは、NHKの「よみがえる新日本紀行昭和の日本が鮮やかな映像に」で、件のそれは、「都ぞ弥生札幌・北大恵迪寮」というものであった（元番組1975年/初回放送2025年2月1日）。別の大学であるが、私も、かなりやんちゃ（パンカラ？）な寮生活（H大学薫風寮）を送っていたので、何とも懐かしい、だが、ある意味羨ましい青春風景であった（ちなみに、私の方が少し先輩?!）

別途番組案内をみると、「寮歌『都ぞ弥生』で知られる北海道大学恵迪（けていき）寮。自然豊かなキャンパスで寮祭に燃える学生たちの青春を描いた昭和50年の新日本紀行がいまよみがえる。番組から半世紀、200万都市に成長した札幌市の中心部に、川が流れ農場まである北海道大学のキャンパスが今も広がっている。恵迪寮は健在で、全国から集まった学生400人あまりが暮らしている。女性を受け入れるようになった一方、寮祭の伝統は続いており、そこで毎年新たに作られる寮歌には、その時々学生たちの気持ちが込められている。新しい寮歌が生まれるまでを追い、恵迪寮で暮らす現代の若者たちの思いを描く。」とあった。

しかるに、「昭和」と言えば、今は遙か昔ではあるが、私達にとつては、現在そのものでもある？何故なら、その人となりや価値観は当時のままであり、好き嫌いは人それぞれであるが、そこでの体験（パンカラ？）が、その後の飛躍（挫折も含んだ？）の糧であったことは間違いないからである！

○モデレーター？またしても、新語が?!

モデレーター？私が知らない（遅れている？）だけなのか？最近では、こうした新語（英語）によくぶち当たる！調べてみると、「コミュニティの安全と快適さを守るための重要な役割で、会議やディスカッションの場で、議論を円滑に進めるための司会進行役」とあり、「主にオンラインコミュニティや配信プラットフォームで活動」し、「特にYoutubeでは、視聴者とのコミュニケーションを円滑に進めるために重要な存在で、その役割は多岐にわたるが、最も基本的なものは、コメントやチャットの監視。不適切な発言やスパムを見つけ出し、迅速に対処。また、視聴者同士のトラブルを未然に防ぐための調整役」とある（だからモデレーター？そこがファシリテーターと違う?!）

また別に、「単に議論を先導するだけでなく、参加者の意見を引き出し、建設的な対話を促進する役割」もあり、「議論や会話の調停役（間を取り持つ役）を務める人を指す」ともある。「参加者の意見を公平に扱いながら、話し合いが脱線せず、目的に向かって進むようにコントロールする。また、参加者の多様な意見を引き出し、お互いの理解を深められるように働きかける。企業の会議や座談会、グループインタビューなどの場で、モデレーターは参加者の意見を整理しながら議論を活性化させ、有意義な結論を導き出すことを目指す。」とある。

考えてみれば、最近の私は、ズームを使った幾つかの交流（OKINAWA教育協働アカデミー）等を行っているが、おそらくそれは、ここで言う「モデレーター」としての参画なのかもしれない（もちろん、スキルはともかく?!）

○やっと出て来た「御上先生」評!!一線を越えている?..

一応、「教育」を生業にしてきた身（教育分野の大学教授）として、今回の日曜劇場（TBS番組）は、これまでのドラマ視聴とは、かなり異なる（複雑な？）受け止め方をしている。その場面設定（背後）といい、テーマ（事件？）のリアルさといい、これまでの類似番組とは、大いに様相を異にしているのである！番組案内には、「子供が生きる『学校（私立高校）』 大人がもがく『省庁（文科省）』という一見別次元にあるこの2つを中心に展開。未来を夢見る子供たちが汚い大人たちの権力によって犠牲になっている現実、そんな現実に一人の官僚教師・御上孝（松坂桃李）と、令和の高校生たちが共に立ち向かう、教育のあるべき真の姿を描く大逆転教育再生ストーリー」とある。

まだまだドラマの展開は未知数なので、それを見届ける必要があるが、ここで触れておきたいことは、この「御上先生」にはモデルとなった教師がいるということである。同作の「学校教育監修」にも携わるK氏（65才）で、「金八批判」をメディアで公言してきた教育者：金八先生の”弊害”で生徒に過剰に寄り添う教員が増え、当時のK氏は子供たちは与えられることが当たり前になったと実感：生徒の目線に立つことは大切：でも、教師は導くのが仕事で、一から十まで答えを与えなければいけない。行きすぎがあると、生徒は自分で考えなくなってしまう。自らの意思で行動する主体性を失った子供の増加に危機感を覚え、教育現場の改革が必要だと痛感した：とあった。

山形県と東京都の公立中学校で教鞭を執りながら、少しずつ教育改革を進め、10年ほど教育行政に携わったK氏。2014年に着任したT区立K中学校（東京）の校長時代には、400項目以上の教育改革を実行して、全国から注目された人でもあるらしい（その後、YS中学校・高等学校校長に着任され、現在は、「教育者」という肩書。その経歴や具現化された施策（改革）を見ると、ただただ驚くばかりであるが、ちなみに、それに付き合った？関係者達が、K氏のことをどう評価しているのかは、私には分からない（本当はそれが知りたい!）?よくある「マスコミヒーロー」であって欲しくないとと思うのは、私だけであろうか?!

（井上）

○テセウスの船！何故これが、問題とされるのか？

先号で、汗顔にも知ってしまった「シンギュラリティ(技術的特異点)のことであるが、実は、そこには、「テセウスの船」と呼ばれる興味深い観点があるようである！すなわち、それは、「パラドックスの一つであり、テセウスのパラドックスとも呼ばれる。ある物体において、それを構成するパーツが全て置き換えられたとき、過去のそれと現在のそれは「同じそれ」だと言えるのか否か、という問題(同一性の問題)をさす。」ということらしい。以前、どこかのテレビ番組で、そのタイトルを冠したドラマを観た記憶があるが、その時は、何のことかよく分からなかったが、どうやら、それも、これに関わっているらしいのである!!

それはともかく(詳しいことは分らないので)、件の「技術的特異点」とは、「汎用人工知能(AGI: Artificial General Intelligence)、『強い人工知能』人間の知能増幅などが可能となったときに起こると言われる出来事。自律的に作動する優れた機械的知性が一度でも創造されると、機械的知性が自らバイジョンアップを繰り返し、人間には想像が及ばないほど優秀な超知能が誕生するという技術哲学的な主張で、その人智を越えた機械的知性は文字通り人間の理解の及ばない原理で動作し、設計され、更に高度な知性を生み出していくかもしれない」とある。

要は、「AIが、人間の能を越える？」ということであるが、その可否はともかく(可能ではあるらしい)、それによって実現される世界、あるいは人間の自分自身性(アイデンティティ)がどうなっていくのかが問われるわけである(2040年問題)！単純に考えれば、AIと人間との関係性の問題だが、AIを創り出した人間が、そのAIの自律性(意識)によって、どのように変わっていくのかである!!ただ、それは、個としての人間(+AI)と、全体としての人間社会(+AIネットワーク)とでは、まったく様相を異にする？蛇足ではあるが、「テセウスの船」は、あくまでも認識の問題(記憶と自意識)である!!

○(後期) 青春の意味？そこに欲しい「疾風怒濤」!!

表にある、北大の「恵迪寮」のことで、私堂本も、ここで書いておきたいことがある！それは、「(後期) 青春の意味」である！青臭い(恥ずかしい)し、それについては、数多の先人達が想ったり、書いたりもしているのだ、今更にはあるが、ただこの齢になって思うことは、今の若い人達には、同じように青春時代はあるが、それがもつ本質的な意義(後期青春もあるということ)が、ひよつとしたら消え失せて(奪われて?)いるのではないかとということである！端的には、そこまでを享受する機会(場と時間)が与えられていないということであるが、「大人」になることを急かされている(だから、弱いう生き辛くなっている?)!!

余談ではあるが、私は、学生寮時代に、「疾風怒濤」(シュトルム&ドラック/嵐と大波(衝動))という言葉に出会った！そして、妙に気に入っていた！後から知ったが、それは、18世紀後半のドイツにおける革新的な文学運動(古典主義や啓蒙主義に異議を唱え、「理性に対する感情の優越」を主張し、後のロマン主義へとつながっていったとされる)であった。

＜短歌に託して過去と未来の間にて？＞

・ 学生寮 若気の至りあればこそ

その後の己おれなす！ そは今も変わらじ？

・ モデレーター？ コーディネーターや

ファシリテーターと どう違ふ？

・ 文部官僚が 高校教師に？

その背後とリアルに エンタメ超える？

・ やつと分かった テセウスの意味？

パラドックスだが、どうしてこんなものを？

・ 青春とは ある意味深く暗い河？

だが渡り切らなくては いけないのだ！

＜特別コーナー＞堂本彰夫の古代史旅枕(66)

○ここからは、九州での隠れた実績を追う！その一
以上、繰り返すように、ここでは、「近畿大和か、九州か？」というような、単純な「著撰一史的史実解明のスタンスは、その真の姿を見失ってしまう」ということであり、「記紀」が示す「高天原神話(八岐大蛇退治)や「田原の國譲り」等を言ひ、「天孫降臨」「日向三代」、そして「神武東征」等(これらは、すべて九州にある)はそこからのものである。そうした視点での解釈が求められるということである！しかも、神社伝承(神名等を含む)や地名の同一、類似性等は、まさに、「九州」と「近畿大和」との関係を実に示している(ただし、そこに、「吉備」「出雲」「近江」「丹波」等が介在している)と言えどもない!!

ということ、先号(65)では、かなり大きな結論してみたところまで述べたが(まだまだ解明のクリアは今一つなのであるが)、その基本的な枠組みは示すことができたのではないかと思われる(あくまでも自満足かもしれないが)!!そこで、ここからは、これまでの建国史論議ではあまり触れられていない、ある意味では九州だけの隠れた実績・動きを、可能な限り追ってみることにしたい！だが、それは、あくまでも倭国(日本国)全体の歴史の解明の一環であって、一地域の局所的、限定的なそれ(いわゆる地方史)ではない(もちろん、そういう要素もあるにはあるであろう)!!

そこで、まずは、『百済本紀』に見える(『日本書紀』に挿入されている)「日本書紀」について考えてみたい！何故なら、その国は、先に述べた「筑紫倭国と豊国倭国」の並立と相剋の前段階のものと考えられるが、要は、神功皇后、武内宿禰、仲哀天皇、そして応神、仁徳天皇等が繰り広げたとされる、かの「空白の4世紀」の時代の表舞台になったところだったのではないかということからである!!ちなみに、その書国については、『日本書紀』神功皇后摂政46年(紀年では西暦246-300年)、百済王の使者が阜原国(現在の韓国慶尚北道大邱市近辺)に至り、その「日本書紀」への道を尋ねたとの記事があるようである。(つづく) (堂本)

●編集後記 寒い日が続いたが、やつと温かい月(弥生)を迎えることが出来る？積雪に悩まされている人達には、大変申し訳ないが、一刻も早い春の到来を待つのみである！地域が違おうと、とかく「○○ファースト」となりがちであるが、互いのファーストを認め合うことが、まずは必要!!(井上/堂本)

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 47 号

発行日 2025.03. 15
編集・発行 井上講四／堂本彰夫
※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ~岳陽舎~ (井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail: gakyuou17@outlook.jp

○為政は、取引(ディール)という名のカードゲーム?

先日、何とも言えない「幻滅」の光景を、目の当たりにした!本当は、そういう光景(事実)は多々あるであろうが、直接見たのは初めてであった!とにかく、そこには、正義(公正・公平)の国の片鱗もなかった(単なる「取引(ディール)」という名のカードゲームのプレーヤー)のよう!!これが、今の斯国の姿だと言え、そうなのであるが、余りにも酷かった(露骨すぎる!たゞ偶発的であつても?)!!

もちろん、斯国の多くの人々はそうではないであろうが、憂慮すべきは、そうした現実の為政が、そうした人々によって担われている(しかも、一応?選挙によって選ばれている!)!まさに、そのことである(そういうことではないであろうが、私には、そのように見えてしまう!)。だが、冷静に捉えれば、実際の為政というものは、ある意味では「取引(ディール)」であり(外交であれ、内政であれ、そうでなければ、数多の難問・課題は解決されない!!それが現前の真実であり、そのことは、多くの人が、残念だが承知はしている!!

とは言え、その難問・課題が、(こと多くの)人間の「命」に関わるものであれば、「取引(ディール)」だとか、「カードゲーム」だとか、そんなことは、言ってはおられないはずである!そういうことは、過去の悲惨な経験により、人類共通の、そしてまた未来永劫の価値(正義?)となつては、価値を逸脱(凌辱?)しているとするれば、それは、何よりも今後の人類そのものの危機となる!賭けや損得だけで、人はどこまで来たのか?「ホモサピエンス(賢い人)」よ!どこへ行く?そんなことさえ思わせる次第である!!

○果てのない「理想と現実の間」!理想の役割?

これもまた、ある意味では哀しい路傍の弁とも言えるが、今の世界は、果てのない「理想と現実の間にある」とも言わざるを得ない?ただし、残念ながら、その「間」自体は、どこの社会も、いつの世も存在するものではあるので、今更嘆いても仕方がない!それが、多くの、そして名も無き人々の「運命(まゝ)」なのかもしれない!!だが、たゞえそうであつても、ただただ悔しいのは、その理想と現実の間が、時々、為政者やそれを支持する上層部の判断(恣意?)次第で、予期せぬ深淵を招くということである!

けだし、これについては、これ以上のは書きたくないが、ここで想うことは、そうした事態が、己の意思や行動の結果(例えば選挙)であるならば、それはそれで甘受しなければならぬ(自業自得?)、それが、まったくの、自らの与りもしないものであるならば、何とも歯痒く、怒りさえ覚えるものとなる!あまつさえ、ひどくなる一方の現実を目の前にして、そのことを忸怩たる思いで傍観していかへない人間が生まれていることなど、ほとんど忘れ去られてしまうということである!!

時たま、その悔しい現実の一端が暴かれたりすることもあるが、それは氷山の一角であり、しかも、そういう光景には、却って嫌悪感が募る!何故なら、忘れてならないのは、そうしたものは、特定の人間や組織の利益や思惑から生まれているのではなく、今を生きている、それこそ全て人間の合わせ業でもあるからである!!だから、「理想」は、常に、その「現実」と共になければならぬのである(忌避したり、非難したりするだけではダメだということである!!)!

○何も言うことはない!否、言えない!

もう、随分時間も経つたし、何よりも哀し過ぎることであつたので、改めてここに書くことは、本当に憚れるのであるが(ただし、これを書き始めたのは直後であつたが!)、知ってしまった以上、何も残さないのは、逆に許されぬ?とも思い、少しだけ書いておくこととする。それは、「坂本しのぶさん」という人の話である!ただ、それについては、今の私には、「何も言うことはない!否、言えない!」ということ、ここでは、それを知つた経緯だけを書き記しておきたい。

しかるに、それを知つたのは、2月24日(月)、いつもの遅い昼食を、我が奥さんと取つていた時であるが、かけていたテレビ(NHK総合)で、ある番組が始まつた。それは、「ETV特集」とあつたが(おそらく再放送?調べたら、初回放送日:2025年1月18日であつた)、タイトル(坂本しのぶさん 誰か私の声を聞いて)がへび!そうであつたので、観るのを止めようとも思つたが(最近、よくそうしている?)、結局は、最後まで観てしまつた!否、観るのを止められなかつたのである!何がそうさせたのかは、一応自分自身で分からないわけではないが、それを書くと、陳腐ともなるので、ここでは敢えて書かないということでもある!

だが、それはともかく、番組内容は、「坂本しのぶさん、68歳。母親の胎内で有機水銀に侵され、生まれながら水俣病を背負つた『胎児性患者』『水俣病の象徴』として生きてきた。私(吉崎健ダイレクター)がしのぶさんと出会つたのは34年前。以来、継続して水俣の取材を続けてきた。去年、しのぶさんから、もう一度自分を撮つて欲しいと言われた。しのぶさんが今伝えたいことは何か。坂本しのぶさんの生き抜いてきた半生をたどり、しのぶさんの心の声に耳を傾ける。」とあつた(ネット情報より)。

ということ、この番組は、「私(吉崎健ダイレクター)」と「坂本しのぶさん」との、長年に亘る取材・交流を描いたものということであるが、そこに映し出されている様々な出来事、人との出会いは、本当に胸を掻き穿たれるものであつた!もちろん、これは、決して悪い意味ではない!ただ、とにかく今は、彼らは、少しでも報われて欲しい!思つたのは、それだけである!(井上)

○「世界線」というものがあるらしい？

話は変わるが、最近、「世界線」(World Line)という言葉に出会った。もともと科学的・SF的な背景をもつ専門用語で、アニメやオタク文化を通じて広く知られるようになり、今では若者言葉として、日常会話やSNSでも気軽に使われているようである。余談ながら、過日、若い卒業生達が訪ねて来たので、そのことを聞いてみたが、結構普通に会話に取り入れているということであつた！調べてみると、「現実から少しズレた状況や可能性」をイメージする言葉として活用されているらしい!!

改めて、それは、「パラレルワールド」や時間軸の概念さらには相対性理論や量子力学などの科学的視点も押さえておくとより深く楽しむことができる。世界線が唯一絶対のものとは限らない。そんなロマンあふれる発想が、新鮮な驚きや好奇心を与えているのかも。もし日常で「こんな私の知っている世界線じゃない!」と感じることがあつたら、:「世界線」の話で盛り上がる絶好のチャンス。ぜひ多彩な解釈や用法を楽しみながら、言葉の広がりや体験して:とあつたが、ある意味、それは、現実世界では、ある種の「タブー」(禁忌)である「たられば」を、自分達の身(内なる現実)に抱き込むことも言える!!

いずれにしても、「こゝ」した表現は、私たちの生活とSF的発想を結びつける興味深い役割を果たしている。だが、若者言葉として広まりつつある一方で、:物理学的・SF的な元の意味が薄れてしまふという懸念の声も:ただ、言葉は時代とともに意味や使い方が変化するもの。オタク用語から一般化していく過程で、新たな使い方や解釈が生まれるのは自然な流れ:「世界線」という言葉は、時間の流れや空間の広がりを超えて、個人や物体がどのようなルートを取ったのかを示す意味合いがあるのである!だが、この言葉を、オタク・若者達が好んで使うには、それ以上の理由がある?それは、眼前の現実と自分を、常にごどこかで峻別しておきたいというたかさも!!

○時代を象徴する5つのキーワード? 「AI」は何と?

ところで、上記とも関わるが、今を象徴するキーワードとして、「インターネット」、コンプライアンス、豊かさ、結婚、戦争」の5つが挙げられていた(ある新聞記事)！その適否はともかく、そう言われれば、まさしくそうなのかもしれないが、それらは、一体どのように関係しているのか? それぞれが、各自の「世界線」を左右するものであることは分かるが、全体としては、どのように蠢いている(否、絡んでいる)のか?だが、その全体を見極めることは、生身の人間(名も無き普通の人間)にとつては、少々難しい!!

ふと、かの「生成AI」に聞いてみるのも面白いとも思うが、まだまだ意地っ張りの私には、そういうことは委ねたくない!まあ、そんなことを思うわけであるが、要は、人間として、便利さ(インターネット)と正しさ(コンプライアンス)と豊かさを求め、素敵な伴侶(結婚)と、平和な人生(戦争)を歩むということになるのか!!もちろん、そのヴァリエーションは、決して一様ではないが、「より善(よき未来)」は、そこにあるということでもある!!

- ・理想と現実の間はさま だがその現実に己の理想を しかと絡ませなければ!
- ・何も言うことはない!否 言えない! ただただその生 報われて欲しい!
- ・「世界線」 何のことやらと 思つたら “たられば” 抱き込む 己が身とも?
- ・時代を象徴するキーワード? そこにどんな状況が 蠢いているのだ?

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕 ④

〇二からは、九州での隠れた事績を追うその2ー しかるに、この「日本書紀」(中心は「纂錄」)「宋紀」(国)は、おそらく、かの「高良大社」(高良玉垂尊)の存在と大いに関わると思われるが(紀氏)開化天皇/老松神社/松野連氏との関わりと、ある時期(邪馬台国連合景行後?)、倭国の中心をなしていた(「記紀」は、大和政権の九州駐屯地のような扱いをしているが?)だから、百済や、他の南韓地域の国々が、その地を確認しようとしていた?そして、新たな関係を結ぼうとしていた!だが、その「高良大社」(書紀を含む)に関わつて、一方で、どうにも気になるのが、「阿蘇」との関係である!と言つても、その地域、つまり筑後の名族とされる「蒲池(ももい)氏」(最初の「柳川城主」)が、阿蘇と関係があるらしいのである!すなわち、「祖」蒲池と呼ばれる古族(阿蘇)が、阿蘇の「蒲池比咩(ももい)」(阿蘇神社)の元尊とされる「国造神社」(北宮)の主祭神の一人(阿蘇の母神)を祖とする(と伝わっており、その古族が「水沼氏族」と重なっているというのである)さらには、その阿蘇の蒲池比咩は、かの「草部目見氏族」が奉祭する女神でもあるのである!

そして、実は、こちらの方も(?)興味深いのは、かの高良大社の「玉垂神」の名は、いわゆる「潮干珠(玉)、潮満珠(玉)」に纏わるもので、火(廻)国の伝承では、古くは、この蒲池比咩がそれを用いて、潮の満ち引きを司る「八代海の女神」とされていたらしいのである(なお、彼女自身を祀る神社が、宇土半島の付け根にある郡浦(ももい)の「蒲池比咩神社」!しかも、後代において、かの「水沼氏」は「目下部氏」を称すともあり、阿蘇の祖族である「草部目見氏族」も、やはり目下部氏族なのである!!

要は、かの高良大社の神職には、その「玉垂神」の裔とされる「目下部(草部)裔(ももい)氏」があり、その地の高良山前衛部が「目見の峰」と呼ばれ、高良に蒲池比咩の祭祀氏族、阿蘇の草部目見氏族の存在が窺われるのである!ただし、この氏族には多くの系譜があり、九州の古い氏族(日向阿蘇、日向、高良など)は、そこでの祭祀氏族とされ、しかも、本来は中南部九州の狗人(球磨食人)単人に由来するともされる!!(つづく)(堂本)《編集後記》国内外の、想像を超えた人々の動きを、ほとんど傍観するしかないまま、一方で、四季の移ろいや各種イベント(祭事・行事等)は、自らの内で律儀に繰り返されている。これが、「私を生きている」ということであろう!!(井上/堂本)

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 48 号

発行日 2025.03. 30
編集・発行 井上講四／堂本彰夫
※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ~岳陽舎~ (井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail: gakuyou17@outlook.jp

○「岳陽」と共に「」の2年間を振り返る！

とうとう、この通信も、今号で48号。始めてから2年であるが、月に2度の作成であるから、こうなるのである！とにかく、よくやってきたなあ、つくづく思う(それだけ他に何もしていないということであるが)。思い返してみると、創刊号(冒頭)では、次のように書いている。

早いもので、令和5年も、既に、4月半ばとなっている。昨年は、70歳といことで、五希に絡ませ、自らのこれまを振り返り、次なるこれからを展望すべく、このわりの一年を送ったわけであるが、これを受けて、ここに、新たな形を構築することとした。…だが、これは、言われれば、私自身、「自分史」の性格をもつものであり、…要は、自分のための書き物であり、自分の生き様、来方を振り返っていくことを主眼とするものである。…ちなみに、タイトルにある「岳陽」という言葉は、単なる「峻険な岳の間から上り出する太陽」を指しているのではない。もちろんそこには、その情景に託した、私自身の密かな想いが込められていることは事実ではあるが、そこには、もう一つ、今となつては、誠に摩訶不思議な物語が秘められているのである！…ただし、その物語については、裏面担当の、もう一人の私？、堂本彰夫氏に語ってもらうことにしたい。…何故、私が、そのように表現したのかの理由は、そこが明かされるといっていいことである!!(末尾に、明後日(17日、私(達?)は、「五希」から飛翔する。どんな飛翔となるのか？容貌似は仕方ないが、みつともない生き様だけは見せたくはないものである！)

多少端折ったが、まさに「古希」からの飛翔を願ったということである。だが、二年後の今の恰好は(一年目には、特段そのことには触れていない)、残念ながら、あまり芳しくはない？それは、他でもない身体的衰え(特に下半身)のせいであるが(一日の大半がPC作業!)、これからは、その改善に努めること自体が、飛翔？となるのかもしれない!!

○「卒業(式)」と「入学(式)」を考える!!

改めて、今年も、変わらず、様々な「卒業(式)」が行われた！そしてやがて、「入学(式)」が始まる！4月1日が、新年度の開始であるので、そうした儀式が各種各種あるわけであるが、各段階での「入学(式)」や「卒業(式)」は、あくまでも制度的なもので、ある意味では、一人ひとりのライフステージを擬制的に装うものでもある！すなわち、それらは、段階的なライフステージ(学齢期)の終わり、すなわち「入社(式)」に繋がるものであるわけであるが(ただし、「社」は、民間の会社ではなく、大人社会の意)、あるネッ

ツト記事を見ていると(大学の入試方法関係、ただし、それはすべての「入学/社試」に関わる)、それらが何のための儀式なのかと、改めて考え込まざるを得ない？もちろん、これは、「入学/入社」を喜ばないということではなく(そういう親・大人は存在しない)、そこに起因している問題が、様々な社会問題を惹き起こしているということである！…ここでは、その具体を示すことは出来ないが、いじめや不登校、さらには引きこもり、一方では、学校の教職員の疲弊や離脱を生み出しているのは、ここで言う「入学」と「卒業」の不具合が原因なのではないかということである!!より良い「入学」と「卒業」を求めての、言わば

「幸せ獲得競争(学歴社会)」の為せる業ではあるが(緩和されてはきているが、本質は変わらず、その様相は巧妙に変化させられているとも言える)、そこで展開される教育の成果が、そのプラスの面よりは、むしろマイナスの面で拡大再生産されているとしたら、これほど哀しいことはない！せめて最終卒業(真の「入社」)では、喜び合えるものでありたい!

○二人の「知の巨人」？それはともかく！

ふとしたことから、次のようなネット記事を見つけた！「日本人はどのように『学び』をしてきたか」(昨年逝去した「知の巨人」松岡正剛が、最期に日本人にどうしても伝えたい「日本文化の核心」とは。2025年を迎えたいま、日本人必読の「日本文化論」をお届けします。※本記事は、松岡正剛『日本文化の核心』(講談社現代新書、2020年)から抜粋・編集したものです。)である。

もちろん、詳しくは紹介出来ないが、私が、特に注目(驚愕)したのは、「模倣と協同」の重要性というところで、何とそこに、「レフ・ヴィゴツキー」と「世阿弥」の名があったことである！教育学(あるいは教育心理学)を学んだ人は、その双方の名前あるいは理論を知っているとは思いますが、その分野の学者ではない？彼が、どうして、このようなことを知り、そして、述べているかである！流石、「知の巨人」と呼ばれる所以である！改めて調べてみると、彼は、まさに、それに違わない知識人・文化人であった(これまでは、確か古代史関係のブログ？で見ただけ)！ちなみに、私が、その意味での「知の巨人」と認定する(追認？否、親近感が持てる?)のは、「立花隆」と彼である(残念ながら、二人とも、今は故人となっているが！)。

まあ、それはともかく、この「レフ・ヴィゴツキー」は、かの「発達の最近接領域理論」(訳語が、直訳すぎて分かりづらいが)、「世阿弥」は、能楽書の「風姿花伝」(「花伝書」)で有名であるが、何故、松岡氏が、その著作の中で、この二人を採り上げたかである！私が察するに(当然、外しているかもしれないが)、前者は、学習(教育)というものは、今ある状態(これは、それまでの学習ないし教育の成果の総体とも言える)に、何かを付け加えていく(「アルファ」この部分を「発達の最近接領域」と呼ぶ)ことであり、それが、大きくあればあるほどよいということ。後者は、一種の生涯教育論であり、学びには、その時々最適な時期(成長段階)があり、そして、それを乗り越えていくためには、「模倣(真似)と協同」が必要であるということである。これは、昨今の教育/学習理論(アクティブラーニング)と、期せずして軌を一にするものでもある!! (井上)

○「エンパシー」と「シンパシー」をそして、…？

特に差し迫って語ることはないが、「他人への共感」の意味をもつ、二つの言葉（英語があることを、過日確認した。それは、「エンパシー（empathy）」と「シンパシー（sympathy）」という単語であるが、これまでは、その双方の違い（関係を、あまり意識せずに使ってきたように思う）

改めて調べてみると、「エンパシー」は、『シンパシー』と同じように「共感」という意味をもちますが、このほかに『感情移入』や『人の気持ちを思いやること』という意味があります。とあった。さらに、『シンパシー』が、他人と感情を共有したり、相手の心情に同調・同情することであるのに対し、『エンパシー』は、他人と自分を同一視することなく、相手の意志や心情を汲むことを意味します。ともあった。

そこで、「人の悩みに耳を傾けるカウンセラーには、『エンパシー』の能力は必要不可欠です。」ともあったが、とにかく、『エンパシー』は、相手の立場に立って、相手が何を感しているのか、どのように考えているのかを想像する能力や行為であるのに対し、『シンパシー』は相手の感情や境遇に共鳴し、『その気持ち、わかる！』と同意・同調することであると云えます。は、現今の、個々の人間関係や、引いては国と国との関係においては、非常に大事な視点になると思われる!!

これ以上、とやかく言うつもりはないが、ひよつとしたら、現代の人間（ホモサピエンス）は、大切な「エンパシー」の能力を失いつつあるのかもしれない? ○「フアースト」とか、「自分（国）主義」は、ある意味人間（集団）の本能かもしれないが（自己愛?）、ただそれだけではうまくいかないことは、多くの史実が示すところであり、そして、個人のレベルでも、大いに納得させられるところである!! だが、それでもなお、それをゴリ押ししようとする人間や集団（国）は出現する! どうしたらいいものか?

○百人もいる「知の巨人」? 否々、数だけ見れば?!

ここでは、多少余談とはなるが、今回、ひよんなことから、「知の巨人」を調べていたら、あるネット記事（サイト?）では、何と百人の巨人が並べられていた! もちろん、その記事自体は、詳しくは見えないので何とも言えないが、ある意味よくぞ挙げられたものである! どういう基準でそうなったのかは、もちろんこれもよく分からないが、とにかく、そういった人達が、これまでの「知の蓄積」に、大いに貢献したことだけは確かであろう!!

だが、数だけで言えば、今や、AIを含めて、それこそ無数の巨人が存在している! そして、我々は、そうした無数の巨人達が作り上げている「知の蓄積」の恩恵を受けている（招かれざるものを含めて?）!! だが、当然、問題は、そこでの「知のあり方」なのだ! 少なくとも「巨人」と呼ばれる人達は、その「知のあり方」に貢献している人達なのだ! それは、一言で言えば、知の「体系化」であり、人間の存在や活動を意味化する「人間（文化）化」であろう!! 単なる物知りや自己顕示欲ではないということである!!

・「知の巨人」は分かっていた
・「模倣と協同（働）」の重要性! それは何故?
・「エンパシー」と「シンパシー」!
・「知の巨人」! こんなにいても こんなもん?

・卒業と入学 それぞれの段階で
意味（喜び?）はあるが 断続ではいけない!
・「知の巨人」は分かっていた
・「模倣と協同（働）」の重要性! それは何故?
・「エンパシー」と「シンパシー」!
・「知の巨人」! こんなにいても こんなもん?

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕 ④

○二からは、九州での隠れた事績を追う! その3
ところで、『日本書紀』では、第12代「景行天皇」の妃である「襲の武媛」が生んだ「国乳別（こほりま）皇子」を水沼君の祖とするが、襲の武媛とは熊襲の女であり、その熊襲の女と、先の蒲池比咩が重なることはないか!! 太古の蒲池比咩の記憶が「襲の武媛」として蘇ったものなのか? 加えて、かの「大善寺玉垂宮」（高良大社の元宮）の大祝も「隈氏」である。一方の「高良玉垂宮」の神職にも「神代（かみよ）氏」という氏族がおり、隈（熊）神事「鬼夜」は、壮大な火祭りといわれるが、それは、阿蘇神社の「火振り神事」とともに、九州を代表する火の祭祀でもありとされるのである!!

しかるに、その火の祭祀こそ、火肥の氏族の神事を彷彿とさせるのであるが、そこに隠されている「高良玉垂神」の謎とは、高良に持ちこまれた中南部九州の狗人・熊襲/日下部氏族（隼人族?）の神祇が、時代の為政者の手によって忌避されたということの結果なのかもしれない（「あきら彥（あきらひこ）? いずれにしても、かの高良山一帯では、古くから諸族の出会い、移動に伴う同化や統合が行われる中で、阿蘇の日下部氏族など、中南部九州の狗人（熊襲）の神祇が持ちこまれた様子も見られるわけである。ちなみに、815年の『新撰姓氏録』では、日下部氏族は「阿多御手玉垂同祖、火麗降（ひらきふる）命之後也」とあるらしい（阿多とは南九州、隼人の中核である）!!

ただし、阿蘇地方には、例の「多氏」が絡んでいることを忘れてはいけない! すなわち、「多氏」は、以前にも述べたように、神武の、大和での長子「神八井耳命」の後裔氏族とされるが、その子「健甕龍（けんすゑりゅう）命」が阿蘇に下向し、阿蘇神社主祭神となつていたのである! なお、その子の「速瓶玉（はやびんぎ）命」（阿蘇國造大神）は、阿蘇神社では十二宮に奉斎されるとともに、後の蒲池比咩命（海神の女神? 郡浦神社主祭神）こと「雨宮媛（あめみやひめ）命」と共に、「国造神社/北宮」の主祭神となつている。そして、彼らの子が「高橋（たかはし）神」であり、「火宮（ひのみや）神」（こちらは、例の高良大社の祭神または神祇職につながる神?）である。ここに、「多氏」と「日下部氏」、そして「沼氏（ぬまのぢ）（蒲池氏?）」が合わさってくるのである!!（つづく）（堂本）

（編集後記）明後日から新年度である! 私達には、最早関係のない区切りではあるが、社会は、次なる胎動を始める? だが、そこには、新たな試練（覚悟?）も待っている!!（井上/堂本）